

ヘッセ『荒野の狼』の「男女両性具有の魔術」と「ユーモア」 (1)

山路, 基

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

45

(開始ページ / Start Page)

41

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

1983-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005244>

ヘッセ『荒野の狼』の「男女両性具有の魔術」と「ユーモア」(一)

山路 基

I

一九二七年六月、ヘルマン・ヘッセ『荒野の狼』が出たとき、愛読者達を「驚かせ、衝撃を与え、恐怖を感じさせ」、評者の間に全く矛盾した反応、鋭い拒否と絶大な賛成を惹き起こした。彼の「他のいかなる作品もこれほど誤解されたことはなく、著者は繰返し弁護し説明しなければならなかった」⁽¹⁾。

ヘッセ自身、一九四一年の重版後書きで、共感し熱狂的に読んでくれた読者ほど誤解した、とつぎのように書く。五十歳の男の問題を取扱ったのに、迎えたのは殆どが若者だった。私と同年代で共感した読者でも、主人公の苦悩と夢に「読者自身の苦悩と夢」を読み、それがこの小説の「内容の半分」であって、それをもうひとつの永遠の世界が見おろしていること、「積極的で快活な、個人と時間を越えた信仰の世界が向いあっていること」は、「まったく見過ごされた」。これは信仰と救いの書なのだ、と。

なぜ見過ごされたのか。行詰った現代人を「積極的で快活な、個人と時間を越えた信仰の世界」に導くユーモアの魔術が理解されなかったからだ。その、男女両性を具有するユーモア魔術が人々に馴染みがなかったからだ。

同様のことは、この後書きの一五年後にアメリカで出た熱狂的なヒッピーの反応にも見られる。日本でも安保以後期から紛争の時代に向かう一九六〇年代から七〇年代にかけてである。一九五六年のコリン・ウィルソン『アウ

トサイダー』の紹介がきっかけで、『荒野の狼』はビートまたヒッピー族の聖書、サイケデリック体験の最高指導書、幻覚剤パーティの手引書になり、『荒野の狼』ヒッピー楽団が各地で魅了する渦をつくった。

確かに現代の深層にある憧れと不安を明らかにして若者を揺ぶり麻痺させる魔術がこの小説にはある。それは現代にどっぷり浸っている僕らに未聞の生の意味を気づかせ、茫然とさせる。だがその魔術は、醒めた作品の中の劇なのである。作者は主人公に「すべては仮面劇と戯れにすぎない」とか「すべて荒唐無稽だが、一次元だけ豊かで意味が深い戯れと象徴」だと語らせている。そこで戯れつつ暗号と徴しで誘っている世界が「まったく見過ごされた」のである。

この魔術を演じる仮面劇を、僕はギリシヤ喜劇と悲劇そしてソクラテスに見る。それがアテネのポリス形成原理である真剣な戯れであった。その実体は、ギリシヤの遙か以前のシュメールから、後のグノーシスを越えて歴史を動かしてきた。それをヘッセは、第一次大戦を契機とする自己の解体の中で、再生する方法として擱んだ。小論(一)の前半はグノーシスまで、後半はヘッセのその道程を、デッサンしてみる。

そのデッサンに入る前に、一応、『荒野の狼』の中でこの男女両性具有像がどのような位置に出てくるかだけを、瞥見しておく。

『荒野の狼』では「男女両性具有の魔術」を「ユーモア世界への出口」として書いている。作者は小説中の「荒野の狼についての論文」で、主人公ハリーを自己分裂と自殺から救うのはユーモアであると以下の理由をあげて、両性具有の魔術劇場に引きこんでゆく。

主人公ハリーは死を求め荒野を憧れる自分を、現代のあまりにも皮相な文明荒野を独りさまよう狼だと感じ、他人からも「都会と家畜の中にまぎれこんだ荒野の狼だ」と感じられている。そんな詩人である。この「論文」は、ある音楽の中で彼が「見た神の仕事」のように預言的であり、同時に、彼の深層が生みだした予感のようでもある。

分裂症的ハリーは、屢々痙攣的に自殺の衝動に駆られるが、それは無制約者の世界を憧れて自分を捨てる願いか

らも出ている。精神の父権と官能の母権の両極からの原始の衝動に、無制約につき動かされて跳ぶ聖者と放蕩（犯罪）者を憶れるのだ。それが逆に、市民社会と自己の混乱を外から覗きこみ、その苦悩を生きる強さともなっている。

彼は人間存在そのものがこの原父と原母の間に架橋する危うい試みなんだと思う。だが、彼はそんな人間規定の背後に、保身のため中間で満足する市民社会の欺術を見抜き、戦慄する。市民たちは、表面はそんな原始衝動に跳ぶ個人に昂揚を覚え拍手しつつ、市民たちの憶れと恐れを食べ、人身御供で生きるモロクの神——国家に彼らを引渡して、その犠牲の上で、自分たちはしぶとく生きのびてきた。

ハリーは一面では、そんな最初の衝動につき動かされる人間だが、他面では、慎ましい均衡の中で暖かい清潔と秩序を築くよき市民社会の家庭に、忘れた故郷の匂い自分を離れえない。つまり、野性の狼と善意満ちる人間とが彼の中で共存し、互いに隙を窺っては嘲けりあい審きあって、彼はその間で無惨に引裂かれている。ときとして稀な、両者の幸福な結合の瞬間、両者の絡み合いが白光を放ち、眼眩む美しい作品も創る。——そして市民社会は、そんな芸術家や知識人がつくりだす富とエネルギーで、外部のモロクと、彼らの内部にもひそみ吞みこもうとする衝動とを、巧みに飼ひ馴らし生きぬいている。

だが、ハリーはそんな中間の世界を自分に赦しえない。だからといって無制約者の悲劇的絶対世界も開かれなない。そんなどっちつかずの地獄の中で、その業火に煮たてられ精神が次第に弾力を帯び、ついに産み出すものとなつた時、想像力による絶対世界、即ちユーモアの出口（⁵）が開かれる。

吾々は生れた以上、始源の幼子また獣の純粹に帰るといふのは幻想にすぎない。幼子も獣も既にそんな全一性や神と別離していて、分裂し、この世で個々の個体化の道を孤独に歩いている。方法は、唯、痛ましく拡大される魂の中に全世界を受入れ、再び全部を始源と等しく包みうるほどに魂を拡げることしかない。ユーモアはそれを実現する。実際、吾々はみな魂の奥に無数の個を抱いて呻いている。たとえば判事は殺人者を訊問しつつ、一瞬、殺人者の眼の中に、殺人者が彼（判事）自身の声で語っているのを聞き、殺人者の全衝動と可能性を自分の中に発見

し、戦慄する。だが次の瞬間、彼は自分の英^{まさ}に戻り死刑を宣告する。そうせずに彼がそこで見た無数の自己を露わに語り始めれば、彼は精神分裂の印を捺されて葬られるだろう。ハリーは精神分裂に近い。魂の内に、呻きつつ無数の極を飛び移る生れぬまま庄殺された百、千の魂を抱え、「彼の理想は複雑多岐に分裂」する。彼の痙攣や硬直はそこからも来ている。だがその理想も、「ユーモアという想像力の領域で」実現する。

「ユーモアというプリズムが多彩に輻射している光線で、人間本質のあらゆる領域をからかい、また調合し」て、「世の中を生きるに、恰も世無きが如く、法を尊重しつつ、だが法を越えて人恰も持たざる如く√持ち、いかなる放棄でもないかの如く放棄する——この屢々人恰も持たざる如く√と簡潔に表現される高い生の英知も、ユーモアは実現する⁽⁶⁾」その中で、「聖者と放蕩者を一緒に肯定し、その両極を曲げてくっつけるだけでなく、あの市民をも肯定にひきこみうる⁽⁶⁾」。

論文は最後近くで言う。ハリーと同類の地獄の住人はみな「この魔術可能の雰囲気の中に生きている。」そして、「そこへの助走も、またその素質も欠けていない荒野の狼が、この地獄のエロスの感^{シユウエーレインティムス}乱の魔法の媚薬を、うまく煮立て汗を出しきること成功すれば、救われるだろう⁽⁶⁾」と。

——ハリーはこれに対し、私を「私自身より多く知っているが、私はとは知らない」と反発しつつ、もう一度自分の手で自分の仮面を剥ぐ煉獄で変らねば、と思う。だがこの数年、殆ど同じことを繰返した苦痛を思い、絶望的になる。そのあげく愚にもつかぬ一事件で完全に絶望する。だがこんな情ない敗北は破滅に等しい。だが生きる余地はもうない。——そして不思議な少女に会う。彼の少年期の「精神修行と脱線放縦の白熱的仲間⁽⁷⁾」ヘルマンの名を彼に思わず呼ばせるその女性名詞を名にもつヘルミーネである。この精神とエロスの完全融合体の聖娼婦の男女両性具有の魔術で魔術劇場へと導かれる。

……その眼は、「苦悩をなめ尽してすべてを肯定した悲痛」を「冷たく明るく漂わせ、」口は「寒気にこごえた」ように重く話したが、唇の間や口元や稀に覗かせる舌の先の演戯には「甘い戯れる官能と熱い悦^{シユウエーレインティムス}望の欲望ばかりが流れていて、」捲毛に隠れた「無言の」額の隅から、「時々生きた呼吸のように」例の男の子そっくりの「男女両性具有の魔術の波が溢れ出た。不安で堪らないのに、麻酔をかけられたように、半ば放心状態で、私は彼女の言葉を注意深く聞いていた。」……「あんたはきつそうするわ。私の命令をはたし、私を殺すのよ。そのことなの。もう何も聞かないで！」……

……「彼女は男の変装の中で距離を置いて中立的な態度をとりながら、眼差しと言葉と女らしい魅惑的動作で私の周りを包

題で、いまはデッサンに止める。

んだ。私は彼女に、指一本触れないのに、彼女の妖術に負けてしまい、彼女が演ずる役割の中で、これらの妖術だけが続いていて、男女両性具有のそれだった。「彼女はどこまでも若者を演じ」……「皮肉好きの癖を出し饒舌だったが、それはみな、くまなくエロスの光にみだされていて、私の感覚に伝わる途中で優しい誘惑に変わった」……

この揺ぶりのなかで、彼をひとつづつ未知の扉を開いて導くのが、ヘルミーネと彼女が紹介するマリヤとパブロである。ここで、あとのデッサンのためにも、僕の解釈を語っておこう。以下この節の終りまで僕の解説である。――彼らは、ハリーの深層の深い憧れと恐れを現実化し彼の魂を拡げてゆく導師たちだ。彼らは彼の魂の未知の奥から現われてくるようでもある。マリヤとパブロはヘルミーネの分身（切離し拡大された一面）だ。その分身は互いの関係でも示されている。いづれも深い体の奥までの愛の関係にある。両性具有者ヘルミーネが、女ならばマリヤは同性愛の相手でパブロは恋人、男ならばマリヤは恋人でパブロは同性愛となるような表現だ。マリヤとパブロの間も深い愛の関係にある。そんな体の奥までの愛で結ばれているにもかかわらず彼らの関係は、多様な分身が現われ戯れあい誘って戯遊するメルヘン風の月光Vのようで、八神秘な力のみずから変身しつつ相手をも変身させてゆく月光Vの、太古の月神または月神族たちを思わせる。

彼らは、現実の△吾と汝Vが差迫って向いあう他者でなく、そこには吾と汝の二重唱の向う側にある非個人的堅さがある。ひどく現実的でありつつ終始非現実的である。彼らは、主人公を対象への没入と自己への没入から離脱する認識へと誘う。自分を問い直す△自己との間の空間Vをつくる非我の助言者たち、証人たちである。そこに、向う側への運動が起こる。しかも皆その仮面が透けている自由さをもって誘う。主人公はその充実した空虚を受け、反対に跳び移り、自分を全の中の一として自覚してゆく。こうしてハリーは、官能と精神の未開の経験や行動に跳び、驚きと自由の階段をひとつづつ進んでゆき、彼の深層世界で呻いている憧れのいっさいを体験する。だが同時に深層世界の恐れの方も現実化し、そのはて、彼は導師ヘルミーネを殺す。そしてハリーが奈落に陥ちる瞬間はあたかもモーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』終幕を思わせる。モーツァルトの笑みの中で、覚醒での創造か、麻痺での破壊かの瀬戸際に立つ。突然ハリーの叫ぶ独白で、ユーモア世界に入る暗示でこの作品は終る。

II

現代西欧史ではギリシャとヘブル（ユダヤ）がそれを越えて出てきたとされる古代東地中海世界、シュメールとバビロンとシリアでの両性具有の魔術を見よう。あとのギリシャもそうだが、すべて独立に論じねばならぬ深い課

バビロンの古都ニネベで発掘されたシュメール時代のなにかの物語の断片で、仮りに『イシュタル冥界下降』と呼ばれている粘土板がある。そこに月神説話が浮んでいる。

イシュタルは月神シンの娘で、若き日の恋人、穀霊王タムムズを追って冥界に降る。入口の七つの門ごとに、黄金の装身具や衣を剥ぎとられて入った冥界には、同じ月神の娘、彼女の姉妹の死の朔月（無月）の女王がいる。門にも塵と灰がつもり、入った者は二度と還れない。死者は鳥の羽毛を着、粘土と土の塵を食べている。そのなかにタムムズもいる。——他方、イシュタルが消えた地上では植物も稔らず、人も家畜も子を産まなくなる。その人間の苦しみを、神々の侍従で月神の息子の兄が憂え、月神シンにとりなし、シンは宦官（男でも女でもない両性具有者！）の英知神エア（河神エンキの別名！）を創って送り、女王を説得する。かくて、兄が伴い、七つの門ですべてを取り戻し、連れ帰る。

この月神一族は、シュメールがアッシリヤと戦うウルナンム王時代、さらにバビロンと内的死闘をするワラドシン王時代に歴史に登場する。

この粘土板が発掘されたニネベは旧約聖書の「ヨナ書」に出てくる。ヨナは、イスラエルの神の審判を告げ悔改めさせに遠く異教の都ニネベに派遣される。だがヨナはニネベの文化の高さに怖くなり、途中、舟で逃げ出し、大魚の腹中に吞まれ、その暗黒の胎内（陰府）で悔改め、赦されて、再び吐き出され、漸くニネベに赴き、ニネベの滅亡を預言し悔改めを迫る。このようなエロスのな母胎回帰の死・再生譚は旧約聖書ではありえないもので、そんな例外的な形での死・再生で対抗しなければ立ち向えないような、眼まいさせて吞みこむ妖術的異質宗教つまり麻痺させ覚醒させる宗教文化がニネベにあったことを示している。（このヨナ派遣は北イスラエル王国が、周辺諸国と同盟してアッシリヤに対抗したヤラバアム王（七九三～五二）時代である。彼らは前七三四年ニネベに征服され、ニネベは前六一二年バビロンに破壊された。ヨナの預言はそのことである。）

シリヤ北東の山岳からベルシャ湾まで到るチグリス・ユーフラテス下流域の沖積地帯に、前五〇～四〇世紀に生れていた定住小祭祀共同体とその宗教同盟がシュメールである。自治ポリスと同盟ポリス制で、神殿経済・文化を中心に据え、二八五〇年ウル第一王朝は、ウルとその同盟ポリス間の技術・文化流通を、活潑な共和制のようにしていた。各ポリスは、民会と長老の合議制で、王制になっても基本は変らなかつた。やがて北部の劇悍なアッシリヤの強権に支配され、ニネベはその首都になる。だが前二二世紀、その支配をシュメールはアツカド人と共に排斥し、シュメール・アツカド王となるウルナンム王（二一三～一九四）は、月神ナンナル神殿を建て、月神ナンナを万神殿の最高位につけた。だが六〇年後に分裂し、再びアツカドとアッシリヤに支配され、その月神族、天の婦人（メッナ）と穀霊守護神シュシンは、アッシリヤ王守護神アツシュールと女神イシュタルになる。イシュタルはアツシュールの女性名詞だろう。

ここで神々の説明をしておこう。じつはこれらの神々は仲介神たちなのだ。シュメールでは主神は太陽神エンリルと河神エンキ(エンは主)。主神は、北方山岳にあって地底から階層なして湧き出る竜がとぐる捲く濃密な霧の中に住む。上流の不可測の気象で押し寄せる洪水は沃土ももたらすがすべてを押し流しもある。河の力が衰えれば太陽は干魃の猛威となり、河力が強くなれば太陽も驚くべき恵みとなる。エンリルとエンキはそんな男女両方の性格をもち、ふたりで戯れながら濃密な霧の中からやってくる。地理的条件でボリスはどちらかを祭る。祭司は祭神の反対の性の巫女か神官で、その神は相手祭司から互いに「私の神」と呼ばれる。しかもその階段状神殿は全く反対の「地底深淵」と「聳える山」の名を一つにし「地底から階層なす山」また「竜」である。主神がそうだから、彼らに穀霊王ドウムジ(タムムズ)をとりなすシュタル自身両性具有になりさまざまの分身を生むのも当然である。

太古の採集・狩猟期が定住農耕と交替する時期はまだ母権制で、姉か妹が祭司王で、兄か弟が政治を執る。この兄か弟が國王となる父権移行下でその姉妹の女神イシュタルが穀霊王のためとりなす仲介神となる。アッシリヤの穀霊守護神アッシニールとイシュタルはそれだ。ただ北のアッシリヤは南の下流ほど脅威と恵みは激烈でなく、主神は影が薄く彼らが主神のようになる。日本での豊饒祝儀では、畑である女が、種を蒔き鋤く男を地母神にとりなすが、激しい気候のオリニートでは、子を次々に食う暴虐の天空を去勢するため、大地母神が勇敢な男を求め、大地を助ける息子も現われる。だが天空と大地は一体で子を生む夫婦、すぐ大地は後悔しその男を恨みだす、つまり男を誘い出し、成功すれば激しく嫉妬する。北の女神イシュタルも南では、大地母神デメテルが死んだ穀霊を喰ひ断食して穀物が実らなくなったのを、陰所を現わして笑わせ、その断食をやめさせるバウボウ(天鈿女)のような性的誘惑者の分身も生む。ともかく誘惑者であり、同時に嫉妬する怖さをもつ。そんな仲介神として南シュメールでは天の婦人つまり神秘な力でもづから変身しつつ他をも変身させてゆく月光である。

そして新しく南に現われたバビロンは強力で柔軟かつ豊か感性と官僚・祭司性でシュメール祭祀を継ぎ、異質な南と北の両極を統合する。その勝利神が太陽神となり深淵の竜を呑みこみ、その混沌の体から天地を創り、絶対王権の守護者となる。だが豊かで硬化しない。絶対主権王の新生を祝う新年祭の間、一方でその創世神話が誦されつつ、他方で一切の階級差別が撤廃され、王も悔改め儀式に服し、仮面の代理偽王を擲擯する愚王嘲弄の無礼講が開放される、そんな柔軟さがシュメールの神々にもその場所を与えてゆく。

そのバビロンに表面は融合しつつ、再統一をはかるシュメールの「シンの僕」ワラドシン王(一八三四〜二八)が、月神シン以下の月神一族の神殿を建てていた。そんな宗教的競合と戦いの中に月神族も置かれていた。

月は古代の妖術師である。ひと月の中で、満月から欠け始め、様々の形をとりつつ匿れ、また新月として生れ満月に至る。他方、一日の中でも、昼と夜の境界で、夕暮れには沈む太陽と大地から生れて、太陽と大地を眠らせ

る。あるいはその月光で大地を満々の水に変身させ太陽を溺死させる。昼の間に灼け萎えた稻をその満々の水で甦らせ、朝にはその太陽と大地を再び眼覚めさせる。その幻惑する交替と転換の中に大地と太陽、光と闇、酷熱と寒冷をひきこみ、妖しく戯れ、ちやうど女の生理を司って、男たちを動揺させつつ、いつか子供を生むように、隠れて生物と植物を衰弱から守り実らせる。そんな両性具有の魔術を持つ。

ウルクの神殿で月神イナンナは、獅子と蛇と鳩を従えている。増水した河はうねる蛇、暴れ狂う洪水は牙むき吼える獅子、洪水が運んできた新しい土に顔を出す若芽をくわえ、その終りを告げるのは鳩だ。その蛇、獅子、鳩を従える月神は、ポリス形成者たちの「蛇の如く賢く鳩の如く素直な」、活発な戯れを示している。イナンナとイシュタルは二重身で、愛慾と詐術の女神、イシュタルは干魃での河神の不実と共犯するふりしてイナンナや男の分神シュシンを誘い出し、みずからシュシンになったりもして、皆で太陽神と河神に対抗する。主神がアツシリヤ治下で深淵の竜になれば、彼らの元締め月神シンも現れる。「イシュタル冥界下降」は、七つの門の試練の干魃・洪水・冬を越えて守られた穀霊王の新年祭説話（成人式儀礼）の一断片だ。同じニネベから出た『ギルガメシュ物語』では、月神たちが、暴虐で気紛れな運命の両義性を運命と共犯して揺ぶり、王に真の道を見出させてゆく。これは続編でふれる。

バビロンは粗野な近隣を忽ち征服し広漠の遊牧移動民族も包みこむ。草原を渡る征旅や旅が日常的となり、遊牧民の信仰と旅の道標への北極星や明星に月神イシュタルやナナになる。その過程で蠱惑的月神女神の媚態が去就に迷い、対極に跳び移り、両性具有の戯れも極度に緊張し、挙句、イシュタルは北極星または金星になり、その従者も獅子だけになる。そして月神族の機織りは強烈な太陽の眩惑に呑みこまれる。そのバビロンの太陽主神が、相反する南と北の矛盾を統合する、あの百八十米に及ぶ八層階段状神殿「天と地の礎の家」(バベルの塔)は、「天空に築かれた地底の深淵」と呼ばれ、あのクノッソスの方室迷宮のめまいをもつ。その祭祀での王族異性神官と齊宮が王に代ってする代理聖婚(すぐ後のシリヤで説明する)も、裏に両性転換図をもつ。旧約申命記の「女は男の着物を着てはならない。また男は女の着物を着てはならない」という掟も、バビロンの古テキストにある「お前は男になれ、わたしは女になる」⁽¹⁰⁾に対してのもので、あの神官の呼びあい、祭りでの衣装交換か、いずれにしろ裏にあるものを様々に思わせる。

北西のシリヤでは、冥界月神キュベレ女神の男性祭司が、対向する太陽神殿からの神来訪のとき、狂舞して自らの男根を去勢切除し、女らが争って衣を脱ぎ投げかける。太陽神殿の巫女や、年一度の祭りでは国中の処女たちが、旅行者の男に進んで身を委せるのも、いわゆる聖婚だけではない。キュベレは大地母神でもあり、大地母神は祝福と呪詛、創造と破壊の二面をもつ。穀霊王アッティスが嬌慢になると、彼女が怒って彼を去勢しようとする。そこでアッティスの祭司が代ってみずから去勢

し女装する。それが次のどちらかの形をとる。つまり、王が巨大になり太陽神になると、キュベレの怒りに対し予めその予防（豊饒予祝）に太陽神祭司が代理去勢する。あるいは隣国バビロンで巨大な王権を代表する太陽主神が生れると、周辺シリヤが自らの王アッティスを守るため、太陽の対抗月神キュベレの怒りにより太陽神殿祭司の代理去勢が起こる、そのどちらからであらう。

シリヤの海岸地のアシュタルテ（イシシュタルのシリヤ名）聖地アスカロンは、侵入した北方騎馬民族スキタイとその子孫が、女神の罰で八男でありつつ女のようになる病気になる（ヘロドトスの歴史（一ノ一〇五））が伝えるのもその奥を思わせる。

III

この月神の痕跡が、プラトンの『饗宴』の中では、喜劇作家アリストファネス一流のとぼけた語り口で「男女は（^{アンドロギニス}）そもそも月の子孫であった」と語り出される。人には本来、いまの男と女のほかに、男女を併せ持つ男女がいた。

男は太陽、女は大地の子孫だが、男女は太陽と大地を分有する月の子孫で、今日では悪口のうちに名が残っているだけで実体は消滅している。その理由はこうだ。この月神族は頭は一つで、互いに反対を向いた二つの顔の上にある、耳は四つで、隠所は二つ。自分の行きたい方向に、時には車のように足を回転させながらぐるぐるとんぼ返りをうって八本の手足で急速度に回転して進む、と。

この表現は、アッシリヤやバビロン支配下で戦うシュメール月神族の姿が「廻る炎の剣」（創世紀）のように強烈になったさまを思わせる。小ボリス・アテネはその同盟ボリスさらにスパルタ同盟とともに、バビロンを継いだ世界帝国ベルシャを撃破して新世紀を踏み出し、いまスパルタおよびその同盟諸市との凄惨な戦いで疲弊し、その中でアリストファネスはあの栄光の日、金ギリシャが統合し競合したよき日、を回復しようとひたすら願っていた。だから、彼のこの表現には、バビロン時代、絶対王権を支える太陽神信仰に月神族がとりこまれて仕えた姿への批判も含まれている。彼の語り口は、そんな微妙な両義でゆれている。

ホメロスが神々を攻撃する巨人族について語ったとき、じつは彼らのことを語っていたのだ。彼らは強さと腕力にかけても剛の者で、神々に刃向い、天への登攀を企てた。だから主神ゼウスたちが怒って、茹卵を髪で切るように切った。そして男、女はつぎの人間になった。主神たちは、それでも駄目なら、もう一度切り、一本足でびよ

んびょんと跳ぶようにするぞと言つてゐる。ところが、人間は、本来の姿が二つに断たれたので、自分の半身を求めては「互に相手をかきいだいて絡まりあい一身同体になろうと熱望し」、「離れては何一つしようという気なく」、飢えや縊じて何もしないために自分で滅んでいった。で、神々は一案を考え出し、互いの隠所を前に移した。その結果、お互いの性の充足感を中休みにして仕事に向ひ種族も生み出した。それがいまの人間だ。

「従つて僕らは鯀(鯀)のように一つのものを二つに断ち切れ」で、「つまり嘗ては僕らは割かれずに一体をなしていたのだが、現在はその不正のゆえに、まるでアルカディアの人々がスパルタにより分住させられているようなことを、神々から受けて離れ離れになってしまったのだ。だから「一方の運命(再分割)」から逃れ、他方の運命(再統一)を手に入れるため」、「神々の中でもいちばん人間に好意を寄せている友」、「人類に対する救援者であり、人類の最大の幸福がその治癒いにかかっているような、そういう傷を癒す医者」としての「エロスの力の秘儀」を「諸君に授け」たいのだ。要するに、この「太古の姿」「当時完全だったものへの、熱望と追求に、エロスの名がつけられている」と。十頁を越えるその演説の意図は以上である。

このエロスの秘儀が、月神族の両性具有の真剣な戯れである。そこでの願いは、上述のベルシャをスパルタと共に撃破したマラトン・サラミス戦とそれに続くペリクレス時代での、金ギリシャが緊張に満ちて統合し、その内部で競合した、あのよき姿に、アテネを醒そうと覚醒することにあつた。

アリストファネスが伝授しようとする「エロスの力の秘儀」を示す彼の喜劇でのその部分を、次に要約して見よう。

『女の平和』⁽¹⁾は原名「リュシストラテ」八軍を解く女で、主人公の名である。これはアテネを盟主とするデロス同盟とスパルタを中心のペロポネソス同盟との三十年にわたる泥沼戦争下、人身で現われたアテネ・スパルタの両市守護女神アテナイを思ふ。彼女はスパルタも含めた全ヘラスの女の会議を召集し、和平のため一肌脱ぐかと提案する。先づ身を乗り出したアテナ代表が「平和のためなら裸のように身を二つに裂いて、半分を喜んで提供するわ」という。(以下すべて傍点筆者)だがその秘策を聞いてはたじろぎ大反対。秘策とは、閨房ストで夫達をひざまずかせ、互に和平させようというもの。「女は男なしにはいられない、裸でいいわ」とみな叫びだす。やっと最後に、鍛えた男のようなスパルタ代表が「仕方ないわ、平和が緊急必要事ですものね」と賛成し、リュシストラテがうっとりとして「まあ大好き、たった一人の本当の女よ」と言う。アテナとスパルタをもちあはせて、女らしさと男らしさの転換がそこから始まり、アテナでの男たちの女々しい嘆き、女たちの男々しい

闘志の、エロチックで滑稽な交替劇が広がる。それを、コロスの男女の合唱が包んでゆく。終幕でついにスバルタから和睦の使者がくる。その武者とアテネの使者は稚児の關係。稚児「リュシストラテ（女性名詞）」を呼びましよう」武者「お希みなら男のリュシストラテ（男性名詞）」でも結構」という調子だ。登場した彼女（彼？）に、コロスが「全ギリシヤ中の第一の者共が貴方の呪法にかかって降参し、全事件の仲裁を一任したうえは……」と唱い、彼女応えて「彼らがエロースに荒れ狂い、しかもまだ互いに近づき満足を得ないでいるうちに把えれば、それは何の難しいこともない。」で、大団円。パッコス（ディオニュッス）の神歌に男女双生の主神たちに両ボリスの女神アテナイが加わり、平和の合唱となる。

この「軍を解く女神」の「呪法」が、いま、アテネの狂気と正気の両義を孕む極限的緊張空間を、エンシェージアスムス（興奮・激情）と眩暈とエクスタシー（忘我・脱自）と、エロティックと爆笑とで「たっぷり弛め」、「揺ぶり、誘う」「エロスの力の秘義」つまり「両性を具有するエロスの妖術」である。

アテネが重囲に陥ったなかで上演されたのが『蛙』である。アイスキュロスはシリシアに、アガトン、ユウリピデスはマケドニアに、アテネを見捨てて去り、そこでの死が伝えられ、留まったソフォクレスも前年没した。みなボリスを形成する劇詩人たちだった。いまはそのディオニュッス奉納悲劇の中からディオニュッス御自身が、アテネを救う詩人を甦らせ、つれ戻そうと、冥界に赴く。蛇や獣もひそむ三途の河ならぬ大沼を、渡し舟の導者カローンに導かれ、サラミス海戦の三段櫓船さながら、いま敵に蹂躪されている全アッティカ田園の逞しい蛙どもの声かぎりの声援と奇抜な応酬をしつつ、漕いで越える。向う岸では密儀エレウシス信徒の踊りに導びかれて、冥界に辿りつく。そしてアイスキュロスとユウリピデスのどちらを選ぶかの判定問答で、存亡のアテネの緊急課題が提出されてゆく。以上のアテネ版「イシタル冥界訪問」で、ボリス形成の霊を誘い出すディオニュッスの扮装は、彼らが途をたづねに寄ったヘラクレスをしてこう叫ばせる。「わあ、は、は、こりやたまらぬ、唇をどうかみしめてもやっぱり、わ、笑わんでは……」、「サフラン色の（女）衣の上に獅子の皮とはどういふつもりだ。（女物）ブーツと棍棒との組合せは、こりや、どうしたことだ。」ディオニュッスの答えも性転換の誘いである。

『女の祭り』では悲劇詩人アガトンとユウリピデスが材料である。この二人はアリストファネスにとって困惑の対象だった。ともに新思想の代表で、ソクラテスの一統だ。『蛙』で明かなように、その天才や志向の高さは十分認め、愛しつつ、保守派の彼には同調しがたい。彼らはそんな両義で彼を揺ぶる。それがこの二人の両性具有像として出ている。その裏には、彼らの悲劇内容が後述のように彼には些か女性的で両性的に思えていた点もある。そして本質的に、悲劇は両性具有の揺ぶりなのだ。それがこの作品で現われている。

アテネにも、あのイシタルやデメテルを演じる女の祭りがあった。穀霊乙女神を枯死させ魔界にひきこむ男神を呪詛し、断食する祭だ。そこで女達が、劇で女を魔界にひきこむユウリピデスの制裁手段を論じるといふ噂さが事の始り。（アテ

ネは男の世界だ。プラトンも、女は日陰に過し、非力で陰險な種族、とし、アリストテレスも、女は劣悪で支配さるべきもの、とする。そんな女性蔑視のなかで、ユーリピデスは、メディア、バイドラ、ステネボイアといったヒロインたちをおして、そんな男の勝手への復讐、女の執念の爆発、拳句は不倫に走る叫びを書いて、アテネの深層を（ディオニュソスの）揺ぶっていた。）大恐慌のユーリピデスは分身ムネシニコロスとともにアガトンの所に駆けこみ、女装して祭に行き弁護して貰おうとする。アガトンは端麗な容姿と、新奇な趣向を典雅さで包んだ作風とで、女達に人気があったからだ。アガトン同様、新思想で女の味方の両性的なユーリピデス、しかも民衆の味方だから、その分身は、アガトンの名も知らぬ、頭迷で瓢金の、皮製の大きな一物をぶら下げた老爺である。

登場したアガトンに、慌てて物陰に隠れた瓢金老人、「わしは盲目になったのか、誰も男は見えん。キュレネー（有名な娼婦歌妓、性技四十八手の名手とされた）だけしかおらんがな。」アガトン言葉を按じつつ作劇中のコロスの合唱を朗読する。その神歌も両義的な神々の性転換の揺ぶりだ。老人「感きわまつて呻き」、「なんてやさしい気持のいい唄じゃ、や、や、を造りの、小娘みたいな、舌の先をちゅっと吸いの、ちよっぴり先をつきだしの女神さまがた、おかげで聞いているわしまで（男色の、）お尻の下がまさにむずむずしてきたわ。」「ところでな、おい、お若い御仁、あんたは何人か、アイキユロス風にあのリュクレイオスの狂言がかりで訊ねてみようが、『その男、女は何人じゃ。祖国はどこ。その着物はなんじゃ。』などという風俗の乱しようじゃ。その絃は黄色い衣に、また堅琴は頭髮の網にどう映るのか。香油の瓶と帯締めとは、何と不釣り合いなことじゃ。そも手鏡と剣とはいかなかなかわりがあるのじゃ、ええ。』さて君自身じゃね、おい、お若い衆、いったい男に育ったものか、ならどこに一物がある。短上衣やスパルタ靴はどこへやった。じゃあ、女なら、どうだい。そんなに乳房があるね。なんという。なぜ黙つとる。そんならいまの歌からでも、お前の素姓を探り出すかね。自分で言おうとなさんなら。』——劇の筋も一寸触れよう。アガトンに逆手をとられ断られたユウリピデスが、結局この分身を女装させて祭りに紛れこませ、忽ち疑われ、身ぐるみ剣がれる。一物が曝かれ、アラアラ可愛い、隠れたわ、後ろに出たわ、また前よ、コリント地映を見えつ隠れつゆく船みたい！と大混乱、やっとある女が抱く赤児をもぎとり生贄にすると脅し、もともと彼女達がやっていた八穀霊嬰神と嘆く女Vの△死と再生劇Vを爆笑の中でひき起こし、笑いの脱自に揺ぶってゆく。

両性具有魔術ではないが、対立を統合するという本質は同じ『鳥』がある。ギリシャの現状を嘆いて全アツティカの鳥達が集り、大空で歌い、饒舌り、平和の国を創る。地上で騙しあい、明け暮れながら、神々に犠牲を捧げてすまず人間の、犠牲の香ばしい匂いが、その中間で妨げられて天界に届かず、困った神々と人間共が屈服し、戦いをやめる「真剣な巫山戯」だ。

アリストファネスは、憧れと恐怖の両極を振り子のように跳び、仰合評論家と煽動政治家に振廻されヒステリカルに泣き笑うアテネ市民の表層の内奥から、大らかなまた潑刺たる笑いを回復しようとする。

演ずる役割の両義のちぐはぐが、滑稽を生む。猿が可笑しいのは人間に当嵌めるからで、人間的な猿のちぐはぐが滑稽を生む。事柄を浅い所で外部的一面的に部分を切り離して強調すれば滑稽になる。切離した部分の突飛な結びついで笑いを誘い、奇妙奇天烈に組合せて爆笑させる。それで政治家も思想家をもちからかう。だが、彼にはちぐはぐを結ぶ生全体の転換がある。深層から揺ぶり解放する笑いの中で質的転換である。それが表層的なドタバタナンセンス喜劇に墮させない。まず、クロスによる、男と女の本性からの美しい合唱や、アッティカ全土の小鳥達や、地下の全先祖霊の声援を思わせる逞しい蛙達の合唱で、魂の故郷の田園牧歌に誘ってゆく。牧歌自体がすでにイロニーを形造り、その連中の辛辣、痛快、巫山戯る科白で揺ぶる。そして主人公達の男女両性を具有する魔術でめまいさせ、切離した部分のその魔術的結合で両極を転換し、運命の向う側に突抜けさせる。これが彼の喜劇をつくる技術である。

ブラトン『饗宴』でソクラテスはアリストファネスの男女アンドロギュヌス像に言及する。確かにエロスは凡ゆる分裂を仲介してひとつにするが、分裂したギリシャが本来、ひとつだからといって、そのまゝひとつにしていゐるか。自分の手足でも壊疽えきそになれば切り捨てるではないかと。そのことでエロスが分裂を仲介してその両義を弛める空間に眼を向けさせる。ギリシャの統合とその内部でのよき競合を目指すアリストファネスの喜劇が、果して狂気と正気の両義を転換させるそんな緊張空間を形造っているか、悲劇のイロニーと等しい両義性の揺ぶりで、その転換を可能にしているか、と問うていると僕には思われる。そしてこの『饗宴』はソクラテスが、アリストファネスとアガトンに、喜劇と悲劇をつくる技術は同一だということを認めさせようと苦勞する象徴的風景で終っている。

そんなソクラテスの揺ぶりは、アルキピアデスが語る、「精神の視力が鋭利に見えるのは、肉体の視力がその鋭さを失おうとする時だ」とのソクラテスの言葉に見られる。そんな「めまい」をつくる「エロスの達人」による「愛知エロシスの狂気と狂躁」の魔術である。△留まれ▽とのダイモーンの声に従って、「狂気でも正気でもある」エロス空間で、あらゆる対立緊張をたっぷり弛めてその両義で揺ぶり、その生みの苦しみを美しい人とともに出産する喜びで耐える。いやそれを喜びにする。その際、一人の美しい肉体への固執からはずす転換が重大で、そこにソクラテスの両性具有的妖術がある。

IV

悲劇を見てみよう。上述のことから、アガトンとユウリピデスの劇が、アテネを両義で揺ぶる両性具有魔術をもっていたことは推察できる。『蛙』でのディオニュソスじしん、アテネ人の深層の不安と憧れを体現して揺ぶる覚醒であった。それをやるのが、ポリスのディオニュソス祭で演じられる悲劇と喜劇である。喜劇『女の祭』でアガトンに向けられたリュクルゴス狂言の「男、女よ、祖国はどこ?……」は、アイスキュロスの、北方トラキアを舞台に借りた『エドニア人たち』のなかで、リュクルゴス王（スパルタ国制の伝説的設立者）が、ディオニュソス化身が祭司に向って叫ぶ科白で、ユウリピデス「パッコスの信女たち」のベンテウス王の科白原型だ。

アイスキュロスは悲劇の最初の幕開け詩人である。彼の三部作で、トロイ戦争の総師アガメムノンの死をめぐるミュケナイのポリス形成の苦闘劇がある。（悲劇は一日に三部が続けて上演された。凱旋したアガメムノンを、王妃クリュタイメストラが、留守中に密通した情人アイギストスとともに殺し、アイギストスが僭主となる。彼らを倒す遺児オレステスと長女エレクトラの物語である。そこでの両性具有魔術の一端をかいま見てみよう。

まず始めの『アガメムノン』。凱旋の報告を市民に告げる王妃に、コルスが「殿方みたいな利発な御言葉」と言えは、妃は「さあ、一刻も早く殿に伝えよ、出発の時と同様にあの方にはまめやかな妻、仇の人には手敵しい女を」と答える。「あの方」は一方アガメムノン、他方アイギストス、「仇」は一方、告げ口するかもしれないコルスの長老、他方アガメムノンをいつか意味している。コルスの「殿方みたい」も、屋上の物見の嘆きの「もとはと言えは一人の女が男のような企みをはかる御指図」というのと相応じる皮肉になっている。すべて、その場で自然に出る言葉だが、いつか妖しく裏腹の両義を孕んでいる。そんな緊張した空間である。登場人物は全く知らぬが、それとわかる観衆をそんな両義空間に誘いこんでゆく。そしてコルスとアイギストス。（会話は途中略してかいつまんで紹介）「女みたいな貴方が、家の番（女の仕事）をしながらつわもの間をけがした分際で、大將軍にこうした最後を企むとは。しかも自分一人でやる勇気もなかったくせに、僭主となろうというのだな。」「欺すというのは、むろんはつきり女の仕事にきままっている。私は親代々の仇として疑われていたからな。こ奴の財をもとに市民を統御してゆく道をつけるとしようぜ。」「ならなせまず自分の女々しい魂を自分でやつつけて、事を仕遂げようとしたかった。奥方に殺させて。……ああ、オレステス殿!」という風だ。

次の『供養する女たち』は、夢を見た王妃の命で、アガメムノンの墓に供物を捧げにきた黒衣の女たちの登場で始まる。王妃と黒衣の女たちの不安から浮び出たように、墓前に総髪の方が捧げられている。エレクトラもやってくる。その対話が、女たち「誰のかしら、誰か娘の?」でも髪を献げてお悼みするのは仇のはず。エ「私のもの（女髪）そっくりよ。あの女のは

ずはなし。……オレステス！」と始めから両性具有のめまいにひきこんでゆく。女らに代ってオレステス現れ、エレクトラと相擁して、二人して雄々しい男となり、あの「二人の女（一人は女同然だから）」を倒すと語りあう。そこで語りだされる妃の夢は、大蛇を生み、子供のようにオムツに包み、乳房を含ますと、乳の中に血の塊が出た、というのだ。そしていま、二人はみずからその蛇となる。それは二人のやりとりにも、「男のように私を……」との彼女の願いにも現れ、その絡みが最後まで続く。オレステスが母に刃をかざすと、母は胸を開き「お前を育てたこの乳房に免じて」と女々しくすがり、「お前の父親の落度も云って」と乞う。彼が「私は父の自由の子だ」と言えば、「母親の呪いを知れ」と脅す。「じゃ、父の呪いは？」と反問するオレステス、そんな切迫した苦悶のやりとりで、男と女、親と子の愛と憎、情と理が絡み、性的エクスタシーの転換で観衆の深層を揺ぶってゆく。それは、母を殺した彼を追う復讐の老女神らの蛇の髪にも現れ、すくむ彼はアポロにすぎない。

次の『慈みの女神たち』では、アポロが老女らを眠らせ、オレステスを逃がしてアテナイにすがらせれば、クリュタイメストラの亡霊が老女らを醒まし、ポリス女神アテナイが判官となつての、証人アポロと夜の老女らの激論。アテナイが後者にも新しいポリスでの死・再生に携わる場を設けてやり、呪いの復讐女神が死から再生させる祝福の女神となる。第一作『アガメムノン』で、捕囚の啞のトロイ王女カサンドラが、門前のアポロ像に釘づけになり叫びだす「おとことい、ぼほい、おおアポロン、私のアポロン」の前のアポロンは「行く道の神（導者）」、後の「私を滅す神」を意味する。アポロが導くその両義で、観衆の、男らしさと女らしさへの憧憬と逆への恐れを揺ぶりひきだし、現実の向うに生れる真の男と女、親と子へと生れさせる両性具有魔術だろう。

このアガメムノン王三部作は、ソ、ホ、クレ、スでは『エレクトラ』しか遺っていない。それを簡単に見てみよう。

エレクトラは嘆きの化身だ。「私の気持の激しすぎるのは自分でもよく判っているわ。でも生命のあるかぎりはこうして嘆いてやむものか。」「男らしさはひとかけらもない悪人アイギストスなのに、私は弟を待ちわびてただ惨めに死んでゆく」と、あの女（母）を「腐った男」と、アイギストスを「腐った女」と呪ってゆく。いさめる妹を「嘆くのをやめるなら、私は弟を売った情ない女と笑われよう」と嘲笑い、母が、あれはアガメムノンが自分の弟の子の代りに私の娘を殺した、その母親の復讐だと言うのに対しても、それは女の情欲に囚われた女々しい口実、「もし私に力があればオレステスになり代る」と男のように言い放つ。

謀り事でオレステスは死んだと守役が骨壺を届け、彼女は打ちひしがれる。それを知らぬ妹が父の墓で真新しい髪髻を見つけて、姉に告げる。値じぬ姉は、いまこそ二人で雄々しく仇を打とうと（男に返って）妹に迫る。「貴女は男でなく女の身よ、弱い身は強い者に従うべき分別をもつて」と妹。姉「その冷静は羨ましいが、その卑怯は憎らしい」とたけだけしくなるだけ。その末、ひとり骨壺を抱き「オレステス、あなたが死んで、母ともいぬ母様は喜びで有頂天だし、母様より可愛がり育

てたこの私はもう死んでるのと同様よ」と嘆く。そこにオレステスが登場。「夢ではないのよ、いま腕に抱いているのは、この子が戻ってきたのね。会えたのね、望みの人に、お父さまの御子に」と、母と女がいっせいに溢れ出る。オレステスも「抱かれていたい、このまま姉さんいつまでも」と叫ぶが、「すべては首尾を果したその後で」とたしなめる。「ええ、ええ、いつまでも乙女でいます。」「でも気をつけないと、女にだって戦う気性はあるのだから」「ああまた、それで思い出させておくれだ。忘れもえせぬ私らの不幸を」と饒舌りだし、いさめる男とどめない女が激しく絡んでゆく。老守役が走り出て「何という無分別の人達か、生命はいらぬのか、すべては筒抜け、さ、さ、一刻も争って、」と館に入る。

館の中からエレクトラひとり出てきて「男の人達がもうすぐ仕終えるところよ。あの女は、いま葬いのため骨壺の飾りつけていて、あの二人が傍らに立っているの。」と語る。もちろん妃はまだだまされたままだ。その葬いとはオレステスのか、自分のかも知らず飾りつける妃。そして館の内での王妃の死の叫び。そこにアイギストスが急ぎ帰ってくる。「オレステスが死んだ報せを伝える客人はどこだ。」「家の中です。御親切なお妃さまにお会いになって首尾よく想いをとげられました。」「それで、間違いない死んだといっておられたか。」「いいえ、話だけではなく確かな証拠を見せられました。」「それをはっきり確かめることができるのだな。」「ええ、おできになりますとも。よい気持のものではないけど。」「まったく今日はお前もいっぴくなく嬉しいことを言ってくれるな。」「これが本当にお喜びになれることなら、どうぞお喜びになって下さい。」「みなもの、門を開けボリス中に見せてやれ、この男に空しい望みをかけて気負い立った者がいるなら、この死骸を見て、これから俺に素直に従うようになろうし……。」「私もすべきことをしています。やっと強い者に従わねばならぬことがわかりましたので。——で彼も内に入り、刃に倒れ、終る。

この最後の不気味な両義性を孕む描ぶりは、男らしさと女らしさへの深層の憧れと、その逆の男の女々しさと女の憎念への恐れを、エンシェージアスムスとエクスタシー（激情・興奮と忘我・脱目）にひきこみ、転換、覚醒させる魔術である。

その片鱗は同じソフォクレスの『アンチゴネー』にも見られる。

オイディプス王なき後、遺児の兄が王位を継ぎ、一年交代の約束を破って弟を追放する。弟は力を得て戻って戦い、ともに斃れ、母の兄クレオンが王位につく。彼は国民に、国を守り斃れた兄は国葬で葬り、叛徒の弟の屍は放置して野獣の餌食にするよう敵命し、犯すものは死罪と布告する。オイディプスの娘アンチゴネーは、独りで兄の屍を礼法に従って葬る。人の定めた法より、兄妹の自然の愛こそ、愛が駆る人間性こそ神律だと言いつ放つ。怒るクレオンは「いや、まったく私が男とはいえない。この娘が男だらうよ、このまま威張ってられたら……。」と叫ぶ。長老らの「すると、この方の死罪はもうきまったものなのですね」に「そうだ、あなた方にも私にもな」と答えて言う。「さあ、引立てい。女らしくさせてやるのだ。いや、大胆な男共でも、死が近づけば遁れようとするものだがな。彼女は息子ハイモンの許嫁である。ハイモン現れ「聡明で英知にみち

る父こそ子の誇り」と、国民の心の内を語り父を説く。その二人のやりとり。「きまつた法を大事に守り、決して女^{おんな}童^{どう}べに牛耳をとらしてはならぬのだ。止むをえずば丈夫の手で追い落されたがまし。そしたら女にも劣^{おと}つた者と呼ばれずにすむからな。」「肉親の自然に生きる女の美しさ、女の中で最も不当な目にあうのは」というハイモンに「こいつはどうやらあの女の味方をしていくつもりだな。」「ええ、あなたが女なら、です。正道を踏みはずし、神々への務めを捨てて。」「ええ、何と汚らわしい奴、女にも劣^{おと}ろうとは……だが、まだ生きてるうちにあの女との結縁は許さぬぞ。」「では、あれは死ぬでしょう、死んで誰かを死なすでしょうが。」「観衆は、ハイモンの死もクレオンの最後も知っていて、この孕む両義に息づめて揺ぶられ、興奮・激情と半ば忘我・脱自の中にひきこまれている。

死罪の地下牢で、アンチゴネーは、冥府の主が、生きながらいま彼女をつれてゆく住居を語る。」「ご自分が生んだ父上との不幸な縁^{ゆかり}を結んだ母さま」の「呪いを受けて、夫もなしに、住居を頒けに、その方々のところに出かけるのだわ」。ハイモンと結婚できぬ彼女。そして父もだ。父オイディプスは母の子で、彼女の兄でもある。「不幸な結婚をなさった兄上、あなたは死んでまで私をとらえ、いま、殺された兄を夫として婚姻を満たさせるのだ」と。——他方、クレオンは預言者テイレシアスに「死人をさらに殺して何のほまれか。地下に属する者を清めもせず地上に置き、地上に属する者を地下に投じ、それは神々を怒らせ、貴方の血を分けた一人を代りに出すことになろう」と揺ぶられて、屍を葬らせ、アンチゴネーを牢から出しにゆく。だがクレオンが牢に着いたとき、既に首を吊ったアンチゴネーを抱いて嘆くハイモンは、父に唾吐きかけ斬りかかり、彼が跳びのくや、返す刃で自らを刺して死ぬ。母なる妃もクレオンを呪って死に、クレオンはくず折れる。息をのむ観衆の中ですでに八^や真の人間^{人間}が生れている。その八^や真の人間^{人間}は、気紛れで暴虐な運命を自ら進んで引き受けて、運命の向うに出ている。観衆は自分の中に生きている再生したディオニュソスを実感するのである。

このやりとりの両義空間の中に浮んでくる、男らしさと女々しさへの、限らない嘆きと分別への、裏腹にゆれる愛憎相反が、科白の裏から観衆をとらえ、揺ぶり、交錯の中で脱自させ、全き男と女つまり全人を生みだす。この空間は、ひきこみ転換さす誘いである。その空間は男と女の生理の奥の性的エクスタシーにひきこむナカをもっている。しかもひきこんでしまわず、ひきこむす前にハズスじらしに似た誘いのように見える。じっさい、この両義空間では軽いめまいすら感じる。そのめまいは無底の奥にはずされる怕さであり、また懐しさである。感覚が囚われれば意識が浮遊し、意識が囚われると感覚が浮遊し、たがい^{たがひ}にのみこまれる。その振子運動は、狂気でもなく正気でもないめまいにひきこみ、狂気でも正気でもある覚酔を誘う。その振子の増幅する潜在エネルギーには息を

のむ。そんな両義で戯れる運命によって、観客をも弄^{もてそ}び、麻痺させ、息つめた期待を弛めて、彼らの中に非我の証人や助言者を立ち現われさせ、揺ぶる。観客は未聞の経験による驚きと自由の中で、運命の向うに生れる。未聞の隠れた生の意味に覚醒する。これが悲劇の技術なのだ。

悲劇の運命の揺ぶりは、喜劇の技術である揶揄と等しい。いま見たいいくつかの劇はもちろん、オイディプス王とティレシアスの激しいやりとりでぞっとする真相が顯われる場面でもそうだ。人は、自分を外面的な浅い所で部分的、一面的に切り離して強調されれば怒る。部分が突飛に結びつけられ、奇妙奇天烈に組合されれば憤怒に我を忘れる。そんな科白が主人公たちの双方を憤怒させ、言ってはならぬことや未知の行動に走らせる。そのチグハグの言葉が観衆を振子のように動かし揺ぶってゆく。突飛^{トビ}（アは否定、トボスは場所。場外れ）で揺ぶり、窮地^{アポロ}（アは否定、ボロスは方策。術なし）に曳きこみ原郷^{ヴァン}（ウは否定、トボスは場所。ニュートピアの原語）に覚醒させる。こうして全存在的な質的転換をする。それを、深く美しく深層の憧れと怖れを唱うコロスの合唱と、男女両性具有のエロスの魔術が実現する。弛める空間の中で狂気と正気がその両義的混沌のまま溢れ、転換の中で深層の憧れと恐れ^{アイ}の魔^イが解放され、浄化^{カタルシス}も果される。

V

ギリシャ本土の博物館所蔵の両性具有彫像や奇怪な土偶像の写真が僕の手許にある。差じらい衣をかかげて男根を露わすアフロディテ、それに翼をもつヘルメス、キュービット（エロス）から、グロテスク・アクロバットの顔もない両性土偶まで。あのアリストファネス喜劇から想像して、古典期アテネの密儀導者か、ユニークな戯れか。だが、大蛇に親子で絡まれ苦悶するラオコーン像や鋭治なアフロディテ・ウィーナス像から想像すれば、ヘレニズム期のものかもしれない。

両性具有で揺ぶる両義性を孕む緊張空間は、アテネでもそれほど激しかったが、ヘレニズム世界の各地でも起こっている。その個々に立入る紙数はなく、割愛し、ただ、ローマの『変身譚』とそのあとのグノーシスでの両性具有像を見るため最少限のヘレニズム世界の状況を瞥見する。

前三三八年、マケドニアがギリシャを征服し、ギリシャ軍を伴うアレキサンダーの津波がインドまで呑みこむ。世界は

△ギリシヤ風のひとつ、家△になりその内部での△平等の資格の協調△が宣言された。だが僅か四年で、その△家△△は三百年△抗争する家△になる。最初の七五年間と、次の前二一七年来の百年戦乱で。そして西歴前三一年、前二世紀末経済革命を達成したローマは、「ローマの平和」の中に世界を呑みこみ、前三世紀後半からギリシヤに学んだ、ポリスと同盟ポリスの「共通の国制」で、以後二百年世界を鎮静させた。

この間、各民族固有文化は揺ぶられ掘り返され、世界には混淆文化ヘレニズムが沸き立っていた。どの国にも運命女神や各人の運命神靈や守護現神や呪術や悪霊信仰があふれ、各種密儀がギリシヤの密儀と結び、バビロンの星辰信仰はストア、中期プラトン、新ピタゴラスの運命論と結んでいた。古典ギリシヤ哲学は、大船主義から快樂主義と禁欲精神主義の両極に分離していた。ただこの両者の名をもつストア・エピクロス派はそれとは違い、「星々の間と等しい（間宇宙）」広大で冷やかなコスモポリス」を住居とし、「心の平静」と「無激情」と判断留保の懷疑で、運命の気紛れと変化に乱されない平和を求めた。そんなコスモ（宇宙）ポリタン（市民）世界だった。他方では打続く戦争は巨大な富裕者を生んでいた。彼らは国々の莫大な債務を土地投資や商業投機の私有資本で支え軍隊補給請負で儲けた。その富の結果、アレキサンダーの名を冠したアレクサンドリヤは建築、科学、技術、医学、文芸、数学、人文学を、チグリス河畔のセレウキアは天文学を、創り出していた。

各民族宗教も、このヘレニズム化の中で、自分のアイデンティティを確認しあるいは発見しようと内部で実存化し、外に出して新しい形をつくった。インド仏教は大乗化を果し、ギリシヤ芸術、建築、彫刻で荘嚴され、世界に拡った。ゾロアスターのイランも民族神を超えたミトラ教を生み、それはローマまで滲透していった。ユダヤは、内部で凄惨な対ヘレニズム宗教抗戦が起こり、後期ユダヤ教が生まれ、異常な律法化と密儀化が進んだ。一方、外にあって、ヘレニズム世界の共通ギリシヤ語を語り、イスラムのメッカ巡礼同様、エルサレム詣でに行っていた離散ユダヤ人の間から、世界キリスト教が噴き出し、拡った。それはこのヘレニズム世界がローマに呑みこまれて静まった一世紀半ばのことである。

以上を総括してみると、この間のヘレニズム世界は異常な世界だった。あらゆる衝動が解き放たれて、精神が、知恵が、官能が、創造が破滅に向って激しく呼吸していた。どの面でも両極が揺ぶっていた。その奥からあらゆる極が顔を露わし、しかもその基底となるあのアテネのようなポリスはなく、無底無極の基盤が無気味に口を開いていた。そのなかで野放しの空想、幻想、想像力、知性が、底なき創造衝動と破滅衝動で交替し転換しつつ自己増殖していた。

これを双面・ヤロス門の内と外で政治的に統合したのがローマである。その自信と野性に溢れるローマには、逞しい快樂主義と哄笑が溢れていた。そんなエロスの放笑をもつ『性愛技巧』の著者オウイディウスの、『変身譚』に△性愛△の△両性具有像△が出てくる。それは、無気味なエロチズムと笑いの中で全グレコ・ローマン神話を描出している。いまひとつ、この世界を靈的に統合したのがキリスト教である。そしてそれは周辺にさまざまな混淆キリスト教を生んでいた。それがグノーシス諸

宗教であり、そこにも^{ハ英知的}の両性具有像が出ている。

十五巻からなる『変身譚』の第三巻からがディオニッソス物語で、そこにテイレシアスとヘルマフロディトスがいる。

テイレシアスはカドモスが播いた「大蛇の歯」から生れたポリス創建者らの後裔で、有名なアポロの予言者である。彼はかつてデルポイ神殿近くの森の中で、交尾中の絡みあう大蛇を見、棒で打った。すると忽ち男から女になり、女として七年を過ごす。「八年目にまたその二匹の蛇を見た。『お前達の受ける打撃が、打った者の性を変えるほど、大きな力をもっているなら、わしはもう一度お前達を打ってやろう』、そう言って」打つと、生れながらの男に返った。——そういう形でもその両性具有が語られている。その彼が主神たちに盲目にされ、代りに能力を得る単純な因縁譚も、歴史の遠い奥を覗かせている。

成長したディオニッソスが、各ポリスを播ふり、テイレシアスの予言を聞かぬデーバイのペンテウス王を引裂き、ポイオテアのポリス・オルコメヌスにその嵐が及んで来た。迎える女達の叫びの中で顕現するこの神の姿に、「その頭は、時に角ある逞しき牡牛、時に少女、そしてとこしえに少年の、天上で最も美しい方」という表現がある。第四巻の始りでオルコメヌスのミニアス王の三人の娘も、秩序を攪乱するディオニッソス祭典を憎み、意固地に王宮で機を織る。その退屈しのぎの物語りに、サルマキスの泉の悪い噂の、誰も知らぬ理由はこうよ、と話す。それがヘルマフロディトス因縁譚になっている。

(あの二匹の蛇が絡む杖をもつ商業尊者)メルクリウス(ヘルメス)が、(ローマではバビロンのイシエタル同様、金星になる)ウェーヌス(アフロディテ)に生じた子で、顔つきでその名を貰った父母がわかる少年が、故郷を離れ、見知らぬ土地を旅してこの泉に現れた。泉は「冷たく」「すぎとおっていた」。泉の妖精は、少年のキューピッド(エロスの別名)のような美しさに麻痺し、花嫁にと迫る。しかし逃げられ、それならばこを譲ろうと身を隠す。隠たてる泉の誘いにいつか裸になり泳ぎだす少年を、妖精は蛇が稜物に、葛が大樹に絡むように抱きしめる。妖精の、永遠に引き離さぬようとの願いは神々に聞き届けられて、「ふたつの体はそのまま溶けてまじりあい」、「もうふたりではなく、女とも男とも呼ばえない両性のもの」、そして「男と女のどちらでもあり、しかも、どちらでもないように見え」るものとなってしまふ。

手足の力もなえ、半分しか男でなかったのに気付いた彼は、お父さま、お母さま、この泉に入る男は、みな半陰陽になり、この水にふれる者は女のように力がなくなるようにして下さいと叫ぶ。両性になった息子の言葉に心動かされた両親が泉(いまは息子でもある!)に願いを叶えてやった。以上がああ悪い噂の理由だ、と。

娘が語り終えると、突然鉦鼓、笛の響きとサフラン、没薬の濃い香りが包み、機も糸も織物も、葡萄の蔓、葉、赤紫の房に変る。時は薄暮(昼と夜、光と闇の中間、例の両義空間)、包む炎の中で野獣達の幻影が咆哮し、炎の光を避ける物陰を探す三人娘の縮める手足をたちこめる煙の薄膜が包む。薄い翼が腕に拡り、空中に浮き上り、鋭い啼声を発して光を嫌って飛び廻り、人家にねぐらを求めて森と往復する蝙蝠(黄昏から出た)に変身する。——この噂にまつわる出処は、先にシリヤの項で

見たアシメタルテ聖地アスカロンの伝説だろう。いづれにしろここではもう両性具有魔術師ヘルマフロディトスはローマの野性的ディオニュソス性にとって代られている。

このディオニュソス性にとつて代り、いわば新しきディオニュソス宗教性をとったのがキリスト教ともいえる。キリスト教は「ユダヤ人は徴を求め、ギリシヤ人は知恵を求める。されど我らは、十字架につき死から甦ったキリストを、宣べ伝える」といい、この死からの再生者は「もはやユダヤ人でもギリシヤ人でも、奴隸でも自由人でも、男でも女でもない」と告げた。この告知は、前一九八年来、対ローマ反乱を続けていた奴隸達（ローマの残虐な見世物「剣奴」のスペルタクス反乱は、前七一年アッピア街道を六千の十字架で埋めた）と、たえず蜂起する辺境従属民達、そして婦人達の魂を囚えた。このキリスト教はヘレニズムのあらゆる両義的揺ぶりの中で、いわば人神性と人性の両性を具有する導師[▽]キリストによる揺ぶりによつてその両性を転換し、罪の麻痺から未聞の新しい人を覚醒させようとするものである。この神と人の両性転換はエロスの男と女のもその跡が見られる。そしてそれは、このヘレニズム化の中の各固有民族宗教に連鎖的の反応を呼び起こし、周辺にさまざまな混淆キリスト教形態を生んでいた。グノーシス（覚智、靈智、神智）とは、感覚的信仰に対する悟性的認識を言うギリシヤ語である。ローマはバビロン同様、あらゆる原始衝動にも宗教にも寛容で、ただ皇帝礼拝だけを求めた。ヘレニズムで生れ、同様に内懐ろの広いキリスト教も、唯一の神のみを礼拝することは譲れぬ中心である。始まった凄惨な迫害の中で、もともとローマの衝動的快楽主義に批判的なキリスト教はさらに硬化し、座標的に対極的精神性に身を固くする。このなかで、一度はこの統合を受入れた辺境諸民族、奴隸、婦人らの深層の魔性が抑圧の中で呻きはじめる。彼らがこのグノーシスの中に新しい覚醒の道を求めたのは必然であった。これは、いわば旧約から新約に至る覚醒史を裏返すもうひとつの深層覚醒史と言え、キリスト教を怖ろしい内部混乱に陥れるものだった。以下に、⁽¹⁴⁾ 龍大な原資料からその二、三をサンプルとして、それらの中で男女両性具有がどのように位置しているかだけを全く僕流にデッサンする。

『この世の起源について』（シリヤ系）

ここでは英知と諸力の格闘が中心である。アルコーンとは当時、ローマの絶対権力を代表する各属領の執政官^{プロコンスル}のことで天的魔的な権力象徴である。彼らは中界に住む。上界と中界と下界があり、下界はまだ水が覆っている。英知は上界と下界の間に漂い張り廻らされた薄絹の帷帳のような妖術師である。

始めに上界には真理の国（時）の内なる光と外の影がある。英知はその洞察から、その影を闇と呼ぶ。そのようにやがて闇に力が現われ闇が物質を生む。だが闇から生れた物質はより強きものを嫉妬し憎悪する。信仰により誤りを知った物質は自分の真の支配者を渴き求める。そこで英知は支配者として両性具有の混沌の子を送る。（混沌は光と闇も含めて多様な両性を

具有している。その両性転換者が子だ。だが物質は水上のその影（闇）しか見ず、地と水と諸力（カキ）をつくりだすだけ。その諸力は闇の力を知り、混沌（無秩序）と呼ぶ。そこで信仰が姿を水に映してやるが、物質は悔改めずただたに無知を恥じ、不死の光の人を求める。そこで「不死の光の人」が水に影を映し、その影が「光のadam」である。その美しい姿に混沌の妻が恋し拒否され、怒って（混沌の中の）光の血を地上に流す。その血から「エロス」が生じる。だからエロスは光と闇を持ち、両性具有である。エロスは神々と諸天使の中に入り、愛と性（イ）ゆるエロスが世界に現われる。混沌の子は、光も知っているの、その光のadamに像って「地上のadam」をつくる。英知は「生ある英知」となって、一方でそのadamに息を吹きいれて生かす。他方で水上に光の玉を投じて女の体をつくり、その光玉を孕ませ両性具有の「ヘルマフロディトス」イブ（蛇もその分身）をつくってadamに送る。

両性具有者イブは人類の原母である。adamはそのように讃える。adamの讃える声を聞いた諸力（カキ）は嫉妬し、adamを忘却の眠りに陥れイブを犯し、自分に服従する子孫を得ようとする。ヘルマフロディトス・イブは諸力の眼を眩ませ、自分の像はadamのもとに残し、自らは「知恵の樹」に入り、知恵の樹となる。諸力はその残像を犯してアベルの子孫を生み、adamとイブの残像が無知の中に迷い出たのを知って喜び、知恵の樹の実を食べるのを禁じる。だが（ヘルマフロディトス・イブの分身の）蛇がふたりに教えて食べさせ、ふたりは眼が開かれて諸力の本質を知り、光と闇を区別し、獣に名をつけ秩序づける。諸力はadamがこれ以上に「生命の樹の実」を食べて不死となり彼らの審き人となるのを恐れて、ふたりを楽園から追放し、「炎の剣」で間をさえぎる。そこで「生ある英知」が諸力を天界から追放し、悪霊とする。悪霊は人間を無知と忘却に陥れるが生ある英知の「ロゴス」が知識を開き、「全き人」が真理を示して混沌の子は追放され、天地は水底の深淵に崩れ落ち原初が回復する。各人は自分の由来を知り、認識と行為でその本質を実現する。

『ヨハネのアポクリフォン』（シリヤ・エジプト系）もほぼ同工異曲で、少し違った点だけ紹介する。

導入部では「私は父であり母であり子である」と語る復活のキリストが奥義への参入を求め、結尾ではキリストが鷹の姿でadamを食べ、知恵の樹に自分を顕現する。上界には第一の人間―万物の父―初めの光と、第二の人間―思いと、第一の女―聖霊がいる。第一の女から光が左右に溢れ出て、右はキリストを生み、左は奈落の闇と水にまで落ちる。奈落・混沌でのその「光の残余」が「男・女なる英知」である。その男・女・英知はこの奈落界で肉体をとり混沌の子を生み、みずからは「光の残余」の力で跳ねあがり肉体の桎梏を脱する。後に残された混沌の子は諸力（カキ）に苦しめられ、孤独の苦みから奈落の沈溺物に欲情し、「理性」を生むが、それは恰も自分の尾を呑みこむ蛇のようで、忘却・不遜・嫉妬・悪霊がそこから生れるだけだ。そこで彼らを導いて両性具有のadamをつくらせ、知恵の樹ならびに蛇を諸力と争奪する戦いを展開する。

『adamの黙示録』（パレスチナ・イラン系）は、両性具有者の魔術師・英国のフォスター（フォルスター）、ドイツのファ

ウストの原型である。アダムはイブから永遠の神の覚知を教えられて、造物主と諸力たちの中を歩くので、彼らは怒りふたりをセツ人の中に墮とす。セツ人も覚知たちだが、まだ実を結ぶに至っていない。諸力はそれを知らない。三人の覚知者がセツ人に、じつはそのことでふたりから「大いなる國(時)の種子」がセツ人の中に出ていったのだと告知する。造物主は嫉んでふたりを盲目にし性欲を起こさせる。こうして人は弱さと死の力に陥り、そのはて洪水に溺れようとする。それを見て、上界の九人のビエリデスから一人が離れ、彼女は高い山上で永い時を過ごし、みずから欲情して男女を願ひ、ついに欲情をみだし、孕んでフォースターを生む。欲情を越えた天使らが彼を育て、やがてフォースターは栄光と力を受け、洪水の上によってくる。そして同じような闘いのすえ人を救う。

Ⅳ

このような男女両性具有の魔術が、ヘッセのなかでユーモア空間を伴って必然的に『荒野の狼』の形をとってくる道程を見てみよう。一九一九年、ようやく終った大戦の中で彼は解体の淵に佇っていた。

五年前からの大戦は彼をスイスの静かな隠遁生活から有無を言わず引っぱりだしていた。理性に帰れとの反戦の呼びかけのため、祖国で築いてきた評価も収入の道も友をも一挙に失い、ジャーナリズムを含めた真向からの悪罵と、友人たちの口ごもる非難に包まれる日々が続いた。そのなかで彼はスイスのドイツ捕虜保護機関の奉仕に献身的に打込んだ。無収入に近いその過労に、父の死の傷心と末子の脳障害による重病の苦悩も重なる。七年前、ベルン移住の当初から不幸の影がさしていた妻との間も、『荒野の狼』での表現をかりれば「夜にして崩壊」し「精神病になった妻が私をくつろいだ家庭から追い出し、家庭という岩で辛くも築いてきた「愛と信頼が一挙に憎悪と死物狂いの闘争に変」る。「隣人達は同情と軽蔑をもって見送り」、隠棲の地からも追出され、神経は病み、転々と転地療養を試みた末、強迫性神経病専門医ラングに行き着く。

ラングとはまさに「出合い」であった。六十回に及ぶ治療面接のなかで、彼は自分の心と魂の奥ふかく、どのような憧れ(渴求)と怖れ(恐怖)とが隠れていて、それらがどのような魔力で働き、自分を無意識のなかで衝き動かしていたかを、開き示された。そしてこれまでの作品もそこから生れていて、どのような世界を志向していたかを、フロイトやユングをとおして知らされた。

それは科学者の冷静な眼で実験されている魔術だった。その実験材料は、個人では夢・幻想・空想・芸術作品な

どであり、集団では童話・民話・神話であった。ヘッセ自身、これまで好んでそのような世界を書いてきていた。そこに無意識に隠されていた指向性や予感、兆しと徴し、一挙に彼を新しい方法での作品構成につき動かす。その道を内からも外からも逃れることはできなかった。新しい作品は彼にとって、あの魔力がつき動かし操作する魔術と思えた。彼に『デミアン』を匿名で発表させた理由の一つはそこにある。そしてそれが一方で、作品を精神分析という科学のドグマの単なる従者となることから免れさせ、他方で、人を動かす高い客観性を与えた理由でもある。こうして『デミアン』は同年、一挙に書かれ、そしてその魔術は、男女両性を具有する兆しと切口をいたるところに見せている。

そのことで彼は、デーモンを憑依した人つまりデミアンという先見者に導びかれて、時代そのものの魔を描きだした。僕らは、第一次大戦直後に既に『聞けわだつみの声』が書かれていたこと、しかもそれが怖るべき預言の書になっていたことに衝撃を受ける。

彼は時代の深層で新しい神を予感する少数の人々を描き出す。その神は、ゲーテが西東詩集で、ユングが「埃及の死者の書」で、アブラクサスと呼んだ神である。あのグノーシスの、光と闇の混沌の中で、破壊させる魔的力と創造する神的力を転換させる神である。その混沌の子と戦うのがデミアンとその愛人であり母であるイブだ。覚知者デミアンと新しい人類の母イブ、この「生ある英知」の男女両性具有の尊者たちが、時代の再生の道を導く。見方を変えれば、主人公シンクレアが無意識のうちに憧れまた恐れる深層予感がたぐり寄せる分身たちであり、その憧れと恐れのおたつの力の葛藤を解放する妖術師たちである。それが自然な説得力をもっていて、シンクレアの夢兆や絵の中に現われる無意識の恐れと憧れを現実化してゆく時代の破壊と新生に、僕らを参与させる力をもっている。

ただその際、小説の舞台が幼少年期のため、深層からの無気味な力が、彼を弄び戯れるイロニーとしては自覚的には把握られず、だから、彼がそれと真剣に巫山戯る弛める空間であるユーモアは現われない。そのため、いまヘッセ自身が置かれている中年者のぞっとする孤立と崩壊での、具体的展望は開かれていない。

この点について、彼は一九三一年のある書簡のなかで、この一九一九年を回想して次のように書いている。この五年余り、彼はこの戦争という最もいまわしい愚行に熱狂的喝采を送る新聞、野党も含め、「中でも、教授たちと他の公職にある知識人たちが最も大声をたてていた」のを見ただけでなく、「私達のささやかな反対、批判、民主主義までが三文記事にすぎなかった」事実を痛烈に挾られ、「私たちの今日の言葉、新聞、学校、文学を」、「私自身と私のそれまでの文学活動を含めて」「つづさに検討し、その大部分が偽りで空虚なものだと認めざるをえなかった」そしてドイツ精神と文学に対する自分の中の偶像はおろか、「自分自身についてのさまたまな妄想も破壊」した、と。このことは『デミアン』が、まだその破壊の確證作業であつても、その破壊口を具体的に埋める展望となつていないことを示している。

ここで彼は、『デミアン』で見た魔の顔を彼よりもずっと早くありと見ていたひとりの作家に気づく。ドフトエフスキーだった。『ドフトエフスキー』(白痴)『随想』(以下『白痴論』と略す)と『カラマゾフの兄弟、あるいは西欧の没落』が書かれる。「何モノモ外ニナク、何モノモ内ニナシ、外ニアルモノハ内ニアレバナリ」と附記されている後者ではこうだ。——文化は野性衝動を巧みに飼ひ馴らすことによつて維持される。文化が疲れて弾力性をなくし、罅(ひび)いと、亀裂にそれが噴きだす。聖者が極悪人が、そして揺れが激しく、硬化が痙攣的になれば、増幅して殉教的聖者や残酷無比の極悪人が、出てくる。カラマゾフの兄弟たちがそれだ。彼らは衝動的に悪に憑かれて善を嘲笑い、善に憑かれて悪を憎む。彼らは「殺人者であると同時に裁判官、野人であると共に最も繊細な魂の持主、完全無比な利己主義者であるとともに完全無比な自己犠牲の英雄でありうる」、「ヒステリーとも犯罪人とも、詩人とも聖者ともどれとも言えない、だが同時にそのどれでもありうる人間だ」。「既に西欧の半分、少くとも東半分は、そんな無秩序の途上にある。その聖なる理想に酔い、その奈落の縁にそつて進んでいる。ドミートリイ・カラマゾフのように酔いしれて、その聖歌を歌いながら。市民たちは侮辱を感じてあざ笑うが、聖者と預言者は慟哭しつつそれを聞いている」。(188)その聖性は「既成の一切の論理と道徳を離れることを求め」、「極悪と見えるものの中にさえも、霊的なもの、必然的なもの、運命的なものを感知する」能力を求めている。

そしてこの奈落の縁に立つムイシュキンつまり「白痴」に出会うのが、前者『白痴論』だ。癲癇発作の縁に立った半秒間でムイシュキンが「一、二度体験したあの最高の体験、それは、最高に繊細敏感

な感覚と洞察の半秒間であり、一瞬のなかで、一閃で、彼がこの世界の中のすべてであることができ、すべてを共感することができ、そのすべてを共に悩み、理解し、肯定することができ、魔術の能力 (Fähigkeit) である。」この思考を私は『魔術的』と命名する。」「彼はその縁 (Grene) に時折近く立つ。それはどんな考えに對しても、その反対のものも真実だと感じられる場所だ。そのことは彼が一つの極からしか真実がないような、いかなる思想も捉も様式もありえないという感情をもつことを意味する。」

人間の文化感覚の最高の現実には、明と暗、善と悪、認可と禁令で世界を分割することだ。世界を秩序づけるためには、然りと否が、善と悪が、分けられねばならない。最初の否と禁止はまったく恣意的なものかもしれないが、それが掟や法になり、輿論と秩序の基礎になるやいなや、それは聖なるものとなる。だがマイシュキンにとっての最高現実には、凡ゆる法律がさかさまになり、対極が等価になる魔術体験だ。白痴は無意識の母権を持ちこんで、文化を終らせる。彼は十誡の石板を破壊しはしない。ただ、裏返し、裏に反対が書かれているのを示すだけだ。

ドフトエフスキーは、このような人間をどこか病んでいる、姿や、癲癇者として示す。新しきもの、未来の担い手、予感される混沌の先駆者は、どれも常軌をはずしているはず者だと。「私達は、この常軌外れと狂氣に對し払わねばならないとアジア人たちが信じている、あの聖なる尊敬とでも云うようななにかを感じている。」「ここに私達は、ここを俺達はつきぬけなければならないのだ。それが俺達の宿命なんだ！ といった不可避なものを感じる。」だから、なにか無氣味にいぶかしみつつ、彼らに摺えられ、彼らを愛し始めている。

そしてヘッセは書く。「未来はわからない。だが道はここに示されていて、明白だ。それは新しい心の態度を、マイシュキンを越えて向う側へ導く『魔術的思考』を、混沌を自分が引受けることを、求めている。」「私達を新しく方向づけ、私達の存在の根元で忘れられている衝動とさまざまな展開の可能性とをそこに見出し、世界の新たな創造、新たな価値づけ、新たな分割に着手するため」に。

このなかで、「マイシュキンが一切を見透したあの数秒、いや、ドストエフスキー自身が死刑に真向って立ち、予言者の眼差しをもってそこから出てきた数分に体験したようなものを、みんな一度は、生涯のある瞬間に、自分のなかで体験しなければならぬ」といふとき、それはこの数年あるいは現時点で彼がなんらかの形で「体験した」報告だ。

こうして憑かれたように、この年さらに二つの短篇と一つの中篇を書き始める。

始めの『クラインとワグナー』⁽¹⁹⁾では、下意識の、いわばジキル博士とハイドの二重人格の絡みが形も造る、運命のイロニーの魔術が、意識され始めている。実直な銀行員クラインはある日、自分も信じられぬ衝動で公金を横領し逃亡する。彼は自分のその行為の中に、かつて新聞で読み妻に向って口を極めて弾劾した、残酷な妻子殺害犯で自殺した教師ワグナーへの下意識での共感が現実化したのを見て、慄然とする。それは彼の半意識での妻への不満が誘いだしたものだ。この半意識がもつ両義性とそのデーモンのエロスの悪戯とイロニーが、意識的にこの小説では構造化されている。そしてここに彼自身の内部のぞっとする悪への省察が始まっているのを見る。そんななかでクラインは、ある女性の救済的愛の中で己れの罪責が逆に却って口を開くのをみる。そして生きることが宿命的に負っている罪責に絶望し、ついに投身する。その縁で、本当の至福に抱きとられる。——『白痴論』の、善悪を超えた肯定に、読者を導く魔術が試みられている。

つぎの作品『クリングゾルの最後の夏』⁽²⁰⁾の主人公の名クリングゾルは、ノヴァリスからワグナーまでロマン主義文学において中世聖杯伝説の人物、魔術師、詩人の導者から肉欲の権化等として現われる、あのグノーシスの男女両性具有者^{フオースター}の中世原型、ファウストでもある。ここではそんな破壊と創造に憑かれた混沌の化身、その魔^{マジック}が顔を現わした画家だ。ヘッセの内部の混沌の衝動の認知作業である。クリングゾルは西欧の没落と再生を予感し、あらゆる非西欧的、異国的、原始的な衝動と憧れに身を托し、凡ゆる対極を美の中に統合しようとする。終局的にはその自分自身（自画像）を表現する苦闘のなかで、永遠の母イブに抱きとられて息をひきとる。この結びは前作と等しい。

そしてこの冬には、二十年親しんだインドにこの魔術思考を見るべく一氣に書き進める。中篇『シッダルタ』⁽²¹⁾である。題名の悉達太子は捨欲涅槃の釈尊ではなく、その出家前の名だ。彼は魂の奥の呼声のまま、沙門となり釈尊

の門に入るが、別の道を求めている自分に眼覚め、旅に出る。その「眼覚め」で第一部が終ったところで筆が動かなくなる。

この挫折を、彼は後に「今迄も何度かそんな体験はしたが、自分の生きなかつたことを書くのは無意味だとこれまでより厳しく経験した⁽²²⁾」と書く。そして彼はヨガや禁欲的な冥想に没頭するが、それもあの魔術的思考をインドという場の歴史的叙事方法で表現する苦闘だった。

そのことは、出版社の選集刊行申出に対して書いた翌年の『選集に対する作者の序文⁽²³⁾』（以下『序』とする。）に見られる。彼はこう書く。私がこれまで書いてきた「小説らしく見える」すべては、近代ドイツ文学いわゆるロマン主義に特有な「抒情詩」の仮装にすぎず、自分の自我感情また世界感情を演出する「詩的試み」につけた小説というレッテルにすぎない。「小説形式を借りる利益を利用したにすぎないもの」か「散文で音楽する単なる楽しみごと」以上ではない。芸術小説と言える「純粋なもの」は一篇もない。たといそのすべてが「ひたすら誠実を願う告白、私の内奥を表現する痛切な憧憬」であつたとしても、「ひとつとしてその告白が完全に純粋であり、表現が救済をもたらすまでになつてゐるものはない」と。「序文」といつてもじつは選集刊行を断つてゐるので、そのことじたい古い自分への激しい擲論である。そのことで方法的にも別の道を自分の内から誘いだそうとしてゐるかのようだ。また、こんな自分の過去の抹殺を公けにしようということは、その別の道が始まつてゐるという手応えがあつたことだ。

この態度は、四年後の「究極までの自己表出の要請」と「美への要請」を統合するイロニーの場をつくりだしつつある『ニールンベルグの旅⁽²⁴⁾』まで統一している。「美の要請」は微妙な対象を即座に正確に把え客観的に表現する修練だろう。だが「究極までの自己表出」も、主観世界での微妙な心理や予感や幻想が深層から志向する微妙なひたを、あの魔術思考で表現することである。そこでの深層からの（憧れと恐れのある）二つの方向が志向してゐるものは最究極の美と醜の原始衝動の解放なのであり、それは作家を救うか殺すかになる。美が感動させ、救済をもたらすのも、そこである。彼にとっては同じひとつのことなのだ。

この魔術の小説的方法化の道は、その翌年の一九二二年に発表された『ジャン・パウル論⁽²⁵⁾』（一八二五年没）に突破口を見せる。

ジャン・パウルは、「魂の中のすべての力で遊ぶ自由な遊びを理想とし、その中ですべてを肯定し、すべてを味わい尽し、愛し、生きようと願う。彼はそんな天才の範例である。」「彼の作品のすべてに、熱さと冷たさの間を、

堅さと柔らかさの間を、自分の性格の中の数百の極とその対極の間を、やむことなく跳び、替るのを見る。このあらゆる極の間の往復、磁気を帯びた痙攣的燃焼こそ、彼独自の文学だ。」

「ありえないほど自由で軽やかに戯れながら対極間を潑刺と振り動く精神」——「ここで彼は偉大なユーモリストになる。そのユーモアは、彼の日常性、つまり貧乏で、神経質に悩み、いまいましさに苦しむ自己の弱さの無言の認識から生れる。この道で到りえた自分 (Ich) の中の本来の自己 (Selbst)」、現実の自己の中の超時間的自己の究極的認識の予感、そのような言葉としてはないが、作品の到る処で現われている。」「A 詩人にとって最も重要なもの、愛は反対物を認知することでは損われず、背馳する魂の諸力間の調和こそが潑刺たる生命を与える到達点だと、彼ほど印象的に説くいかなる詩人もいない。」

この中でヘッセは、ジャン・パウルの『ロマン派とその木魂』の中の随分長い文章を二箇所、そのまま引用紹介して次の様に書く。(以下傍点筆者)「このすぶずぶの粘泥と甲殻軟体動物たちで押上げられ沸き返っている海底、使徒にさまざまな綺麗なまた不潔な小動物たちが手渡されて入るあの袋、あのインドの神、その神の中で、全創造が形相を永遠に交替させつつ、また各々の形相がその意味を永遠に転換させながら、永遠に変化し、自ら産んでゆく陣痛で波うっていて、そこでは存在と影、形相と本質、死と出産が、一つが他に変わりながら繰返し等価になってゆく、あのインドの神——これらの姿は今日新しく表現主義作家たち、またユングやジルベラーにおける深層心理学のものである。」「深層へのこの関わりかたは軽やかに戯れている。深層に参入するには薄膜一枚破ればいい。彼は、幼児の原初形態、人間と地球の前世界が書き込まれている記憶の源泉に立っている。それは凡ゆる歴史を含み、凡ゆる宗教、芸術が絶えず新たに起こっている究極基盤である。」「彼はそれらの幸福な資質、さまざまな着想を戯れるあの軽快、忘却の奥のいっさいを現出させるあの現実を、僥倖にもったただけではない。それを知っており、この源泉の秘密を感じとり、今日の深層分析の思想を語っている。ドストエフスキーを除いてはひとりとしてなかったほど、意識と無意識の間の様々な橋と夢を知っており、それらを育て、研究している。」「魂の機能はみな等しい重畳を持っていることへの深い予感、明確な知とはのかかな予覚が、思想と感情が、なごやかに実を結ぶ共存、調和、完成への深い予感を、彼は持っている。」

ヘッセの喜びが伝わってくるこれらの言葉の最初の現実化を、この年のささやかなメルヘン『ピクトルの変身』⁽²⁶⁾に見る。

これは、ある女性のため自筆の挿絵をいれて書かれ、三年後限定版で公刊するまで、希望者に一部づつ違った絵と肉筆がタ

イブで領けられた。英語のビクチャーのラテン語源ビクトル（画家）を意味するビクトル、この名からだけでも、歌う小鳥の囀りとどこまでも交響してゆくその木魂を思わせる軽快な着想であり、変化と交響の夢幻世界だ。

楽園で、小鳥が花になり蝶になり宝石になるのを見たビクトルは、その宝石に頼んで、かねて憧れのがっしり根を張る静かな樹になり幸福だ。だが固定は老と醜を宿命とする。その予感に、慄然とし嘆く悲しみの葉摺れに、通りかかった少女が心搏たれる。そして互いに魅かれあうなかで小鳥が落とす紅玉の力で一体となる。樹のビクトルはビクトルの女性形ビクトリアを、そして思わずヴィクトリア（勝利）と歌い、樹液にみなぎる生成の魔術と尽きざる変化創造力で欲するままに自由に変身してゆき、そのいずれの形においてもつねに一对であり、明暗、多様、対極を融和する全体であった。

これは新しい知恵の樹である。その禁断がグノーシスの両性具有魔術で解かれた知恵の樹、そして生命の樹だ。精神と官能、魂と肉体の憧れと恐れ的心情と想像と幻想が、その媒介性を生かすのに成功した。想像や幻想はさまざまなものを媒介する。それは対極をも包みこむ。その中で、その憧れと恐れとの両義が揺ぶる陣痛をエロスの美で喜びに変える。そんな両性具有の知恵の樹を手にした予感を抱き、大事にそつと希望者にだけ領けるヘッセの姿。それを可能にしたジャン・パウルやノヴァリスの「詩人の魔術」が現われ始めた。

さらに前二短篇との対比で、あのオヴィディウスの瘠せたヘルマフロディトスが、潑刺たるアテネに帰る勝利^{ニクテ}の声も聞え始める。同じ「変身」でも、「変身譚」の妖精と合体して泉に吞まれる姿は、ここでは身を投げるクラインである。語り手の王女が狂躁の祭の響きと匂いと閃光と地震の中で燃やし尽されてゆく姿はここではクリングゾルである。その軽やかな逆転が、いま「遊び」のなかで起こりはじめている。

こうして再びベンがとられた『シッダルタ』である。確かに、オヴィディウスでの、光とも闇とも分かぬ両義の薄明を孤独な森と暖い人家の間を往復する蝙蝠を思わす悉達^{シッダ}太子が、深層^{シッダ}輪廻と根源生成の聲に誘われ揺ぶられて、疲れはて、水に投身し吞まれようとする姿は、あのヘルマフロディトス、幼児そのままで青年になった「沙門」の姿である。

だがこの新『シッダルタ』には、音楽と匂いと色彩のプリズムが溢れ戯遊し、△白痴△を越して向うに越える道が開かれている。その中で、知恵の樹と少女のように互いに魅かれあうあの導師——太子がクライン同様、投身す

べく大河の縁に立ち、祝福の密語を聞きつつ落ちる眠りの中から、太子を別の道へ、すべてをあるままに肯定する愛の世界へと導く、さながら一体として働く「渡し守」の老賢者、導師は、覚知の英知、ジャン・パウルのインドの神である。そして最後に、彼の諫止も聞かず愛欲の絆での責任（秩序）を追う太子の中で、共に痛み、ついに太子が、有情と非情の一切を抱き、外を抱いて内に融合し、内を包懷して外に融合し、生滅・変化・交替する巨きな輪廻転生の流れと合一する清朗寂靜の境地に達したとき、彼を離れ森に消える。その姿は、グノーシスの生ある英知（あるいは老ティレシアスさえも）を思わせる。すべては、あの導師の愛がもつ、対立を抱合して導く両性具有魔術師の構造である。そしてここには、ヨガ的融解の中にはなく、変化の中に生成を見る創造的魔術が始まっている。

VIII

このようにして、三年を経て一九二二年、世に出た『シッダルタ、インドの詩』は、ただ困惑で迎えられ、殆ど理解されなかった。以後五年、彼は小説を断念し、この魔術的思考と混沌を自己に引受ける自己省察に入っていく。それは彼が後に書いているように「自分の中を一掃し、偽って除けたり沈黙させてきたそれまでのすべてを、内部の混沌とした野性的、衝動的な『悪』をみつめ、自分に引受ける」道、カラマゾフ、白痴論から続いている道である。

この年の『ヤコブ・ベームの召命』⁽²⁸⁾という小論で、「魔術的敬虔思考に没頭する課題に召し出された人」——と、ベームのその「召命」を書く。少年期、ベームは、村の山陰で、赤く輝く岩の間に深い洞穴の入口が誘うように開いているのを見て、中に入り異常体験をする。翌日はもう岩も穴も入口も見当らない。靴職になったある日、未知の客人の異様な訪れ方で同類の体験を更に深くする。この体験から、メーベは全く無学のまま祈りと旧・新約聖書を手がかりに、あのグノーシスと等しい壮大な旧・新約深層史、まさに時代の『昇る曙光』⁽²⁹⁾（二六〇〇）を書き、ロマン派詩人達とシュレーゲルに迎えられる。

このベームを召す二つの事実、『荒野の狼』のハリーが扉の光る文字を見、未知の男からあの「論文」を受け取り魔術劇

場と呼び出されてゆく姿の原型である。なお、ペーメの光と闇、破壊と創造に誘う動的弁証法は、神人・男女両性具有キリストによる、あの△白痴▽での「最高現実」からのものである。シュレーゲルとロマンティッシュ・イロニーを嫌うヘーゲルも「私の哲学の全ては、ペーメにあり、すべては彼から学んだ」と云う。

翌一九二三年の『魔術師の幼年時代』⁽²⁸⁾では、幼年期から、「神の如き悪戯者」の祖父の影響を語り、その東洋の秘密にみちた環境からも、周囲と自分とを魔術的に変えて調和させることをいつも空想していたと、改めて自分を振り返る。そして教科書のヘルダーリンの詩の魔術に十二才で囚われ、詩人という魔術師の道を志し、魔術的現実で自分と周囲を変える、「自分は認識しながら、他からは認識されることなき知者として姿を隠す」を修業したいきさつが、「それが私の伝記の真の実質だろう」と、新しい自伝のデッサンを始める。そして自分と周囲の現実とがまだ分かれぬこの幼年時代は、「すべてが現実で満ち、すべてが魔術に満ちていて、ふたつが共存共榮し、ふたつながら私のものだった」と書く。(この現実充溢の空間をヘッセは『荒野の狼』で、両性とともに官能も精神も内包し、あの童話的荒唐無稽の変身妖術をも持つ空間として、詩人には成人しても還ってくると見る。)そして翌二四年に出る『自伝素描』⁽³⁰⁾では、だが詩人を職業とする「笑うべく恥ずべきこと」を犯した過誤の道を振り返り、「詩人はなりうるものでなくて、唯、あり得るだけ」(傍点筆者)だと書く。詩人という魔術師の道をいま新しくみつめながら。――屢々、これは絶望の告白自伝と見られるが、正反対の試み⁽²⁹⁾なのだ。

この間、二三年九月に四年前から別れている精神を病む妻と正式離婚し、二四年一月、再婚するが、三年で二七年に別れる。理由は後述の詩集『危機』⁽³¹⁾での、彼女は私を狂気させ悩ましたが、なぜ私が満足せず、幸福になれないかをついぞ理解しなかった(「限られぬ夜の詩句」)との彼自身の言葉いがいには、わからない。

一九二四年に私家版、翌年刊の『湯治客』は百頁をこえるが、同じ場所での一九四五年度の湯治記で、最初のこの湯治を回顧して「内省と実験の一夏の数週間、『シッダルタ』から『荒野の狼』への道の半ばで、自分自身と周囲とに対する観劇席の気分、目の前に起こってゆくものの観察と分析において、イロニーの戯れに興じる愉み、投げやりな怠惰と集中的仕事の間、浮遊状態を見出した」(傍点筆者)と書いている。二十年を経てだ。よほど強い印象なのだ。

不安な病気を、腹を据えどうせくつろいで癒す湯治場だ。ある種のだらけた緊張、緊張しただらけの雰囲気がある。「観劇席」は、悪に憤りつつ、同時に、おかしみも感じうる。棧敷では、猪口を舐めながら、手に汗も握る。

怠けと緊張、遊びと真剣の暫定休戦期間は、憎い敵の身にもなって想像してやれる、対立が緩和される空間だ。その発見である。その空間で、他人と自分の分析を△巫山戯る真剣▽でする発見なのだ。そんなイロニーの戯れで△巫山戯る真剣▽を、敵の身になって想像してやれる愛——そんな想像力の愛でユーモアが生れる。ユーモアは外の不快な感情を内なる自己の事柄として△自分に引受ける▽ことだった。あの深層の美と醜の衝動の解放による、究極の自己表出（自己への誠実）と美との二つの文学の要請を、生理の現実として掴む実験が随所に見られる。

そして「私の運命は、詩人の私が芸術の代わりに、思考で世界を征服する実験を、つねに新たに繰返さねばならない点にある」といい、最後に、「ふたつの極の間の動揺、世界のふたつの隅の首石間をためらい揺れる往き来のなか、ただこのなかにだけ、私にとって生の実体があるのだから、絶えず旋律と反旋律が同時に現われ、多彩に統一が、冗談に真面目が、絶えず伴っている章句や文章を書きたい。絶えず恍惚と世界の至福満ちる多彩を示し、その根底の統一を想起させたい」と書く。

一九二五年の『バルザック』⁽³³⁾では、バルザックはつねに繰返し不可能を試みる実験の生涯を、その無意味さを味わう絶望の中から、こみあげる「笑い」で包むことを知った人だと書く。その全作品は「衝動と意識、感覚と精神の永遠の二律相反の壮大な調和を志向する動的立体的徴し」に満ちる「象徴の体系」である（傍点筆者、と。これを読んで僕も、あの巨大な『人間喜劇』シリーズのいわば方法のアラベスク・ドラマに、『セラフィータ』のような聖なる男女両性具有小説が入っていることが納得された。

（バルザックは、『セラフィータ』をスウェーデンボルク（一六八八—一七七二）から学んで書く。一六四八年に終った三十年戦後の荒廃した欧州の深層との格闘で、内と外、地底と天界、墮天使界と熾天使界の、終末的宇宙的綜合を展開したあのスウェーデンボルグ神智学から学んで、氷雪に澄み渡るフィヨルド世界の、熾天使的男女両性具有の若く美しい霊と肉の両界導者「セラフィータ」をつくりだした。）

一九二四年のヘルダーリン論、翌二五年のノヴァーリスとヘルダーリンの『奇妙な、物語と人』は、彼らの常軌外れ、はず

れ者としての生活記録で、あの『白痴論』的構成であり、略す。

その一九二五年秋からの旅行記で二七年刊の『ニュールンベルグの旅』も、『湯治客』と同様の長さで、やはり同様のヘッセの姿勢が続いている。文明社会への反抗と厭世、逆にその世俗の一切を肯定しようとの焦り、その苦痛と戯れと笑いの生の営みでの、多様な統一と融合を求めて喘ぐ。仕事を始めると外界も自分も忘れて熱中し、能率という形で自由を圧搾する社会に抵抗しては全くの無為、投げやりになり、転換を求めて『ピクトルの変身』等の自作朗読旅行を引受けると、その拘束は耐えがたい重荷となつて、往生際悪く終始ジタバタする。だが旅に出ると旅はやはりひとつの自分からの離脱だと感じる。けれど引受けた仕事が気になり、不気嫌な皮肉屋になる。そして彼固有の誠実の中で、その苦痛をも肯定する努力もする。ともかく△緩められた△旅の中だ。皮肉はいつか△巫山戯る真剣△な弾む緩和空間も作り出し、そこでユーモアも生まれる。だから旅は、どこかユーモアの中で、想像と現実、満足と幻滅での別と自が転換するあの両性具有空間だ。△曳かれ者の小唄△のユーモアが、悦びと不安の振幅を大きくしてゆく。ユーモアは敵対を変えて対立の調和と転換を創り出す。その中で深層からの魔的な力を欺して勝つ魔術の勝利を、さまざまな旅空間で実験する。そんな、愛と想像力とユーモアでの△動く魔術劇場△報告といえる。その△劇場△で、繰返し、芸術の「究極までの自己表出」と「美」との両要請を、自分の過去の作品が抱く可能性を対象にして追求し、その掘り起こしを空しく試みている。

この旅の途次、南ドイツのある町で見た月が、彼に、あの十二才のとき読んだヘルダーリンの詩を思い出させる。そして彼がそこで「別の世界」の現実、「魔術にかけられたもの」と感じた現実を、思う。そして「まだ少年の私にとってはその本当の内容を持っていない」この詩行から、いかに「預言者としての魔術」が、「文学の秘密」が、「私に向って脈打ってきたか」を思い、いま自分が味っている両極の揺れをふたたび思つて、こういう「最高のものを体験する瞬間」のために、絶望しつつも、生きる意味が溢れてくるのを書く。（なお、先に何度かふれたここでのドイツ・ロマン派の方法については続篇で見る。）

再婚したマリヤとも別れたヘッセは五十才の峠にさしかかり、肉体の故障と衰えを感じる。身辺の荒涼は心の均衡を失わせ、

それをまぎらす衝動的陶醉、肉欲の幻想に走る。そして醜悪狂暴な衝動の可能性を自覚し、その苦痛を肯定する「人道化の、モリス、」が彼の中に現われてくる。「欲楽と禁欲という二つの懺悔者の間で、私は自分の腰を血の滲むほど打つ。」「生存の罪が」「僧になったり蕩児になったりして」「私の中で許しを求めて叫んでいる」「(インドの詩人バルトリハルに)」と詩に書く。

五十才の誕生日の友らの祝福に答えて贈った詩集『危機』は、そんな狂暴な衝動、獣性を衆目に曝して罪の子として鞭打たれることを望み、自殺か破滅こそ運命だと自嘲的に謳っている。またそんな自分を激しく嫌悪し、死を欲し、愛する女を殺すことを妄想する。「お前は結局この世には無縁なのだ。……この孤独の盃を底まですすり、荒野で死ぬだろう」(「化粧室」)。胸に快樂の花を赤く咲かせ、墮落に汚れ、良心の声を信じえなくなった彼は死を求め荒野に出ようとする。内なる獣的本能にもだえつつも、神や不滅を思わずに生きれない彼は、自分を、皮相な文明の荒野を独り飢えて彷徨う狼と感ずる。「俺は荒野の狼、走り走る。……俺は小鹿にすっかり惚れこんでいる。あのいとしい奴を思いきり可愛がって、鈍っぽい股に深くかぶりつき、淡紅色の血をたっぷり飲み、それから夜どおし独りで吼える。……生活をいくらか朗らかにしてくれるものは残らず、俺から遠去ってしまったのか。……俺はひりひり灼けつく喉を雪でうるおし、俺の哀れな魂を悪魔のところに運ぶ」(「荒野の狼」)。彼はその詩集の「友人たちへの後書き」で、初老の男にいま一度燃えあがる性の本能は、五十男の悲喜劇だけではない。精神が疲れ、動物的自然の混沌に兜を脱ぐようになったのだ。人間になりきる、前進で救いを期待し、「二つだと思っている魂が、千様になり、多彩な万有の形をとる。私は消えて、世界と一体になる」(「楽園の夢」)と告白する。ここから小説『荒野の狼』が生れるのである。

註

- (1) Bernhard Zeller : Hermann Hesse. 1963. フトは邦訳『ヘッセ』井原恵治訳、理想社(一九八二)二〇三頁、二〇四頁。
- (2) H. Hesse. Nachwort zum 《Steppenwolf》. G. S. Bd. 7. S. 412~413. (G. S. は Gesamtelte Schriften 7 Bde. 1958. Suhrkamp. フトは邦訳『ヘッセ全集』第7巻、1958年、412~413頁)。
- (3) H. Hesse. Der Steppenwolf. Erstausgabe Berlin 1927 Bd. 4. S. 361. フトは Der Steppenwolf の中の箇所は頁数のみ記す。ななびとの『荒野の狼』中の文はすべて邦訳。
- (4) Traktat vom Steppenwolf. Nur für Verrückte. Bd. 4. S. 224ff.
- (5) Bd. 4. S. 239
- (6) Bd. 4. S. 239~240

- (7) Bd. 4. S. 81b
- (8) Bd. 4. S. 299, ※S. 360
- (9) このような考え方についてはウラディミール・ジャンケレヴィッチ『イロニーの精神』久米博訳、紀伊國屋書店 (Vladimir Jankélévitch, L'IRONIE) 一〇七頁等参照。小論でのイロニーの論理については本書から多く学んだ。
- (10) 世界の女性史¹、神話の女「死と性と月と豊穣」(大林太良編、評論社、昭50、一二二頁参照。※同二〇頁。月神イナナ、ナンナ、ナナ等の名については一四六頁)等参照。
- (11) フラトン『饗宴―恋について―』一三四頁以下、世界古典文学全集14、筑摩書房、昭30。
- (12) 以下フリストフ・ファネス、ソフォクレスはギリシア悲劇全集、喜劇全集、人文書院、参照。
- (13) オウィディウス『転身物語』田中秀央、前田敏作訳、人文書院、昭51、八二頁以下 (Ovidius, Metamorphoses.)。
- (14) 荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』(岩波書店、一九七二)一五七頁以下に訳出・紹介されている原資料を、筆者の解釈で改変し引用させていただいた。とくにグノーシス解釈はまったく私見である。
- (15) Bd. 4. S. 263
- (16) Am F. Abel, derzeit Zürich. 1931. Bd. 7. S. 514.
- (17) Gedanken zu Dostojewskis «Idiot», 1919, Bd. 7. S. 186
- (18) Brüder Karamasoff oder Der Untergang Europas, 1919, Bd. 7. S. 161—178, ※S. 178
- (19) Klein und Wagner. im Klingsors letzter Sommer. Erzählungen. 1920
- (20) Klingsors letzter Sommer. 1920
- (21) Siddhartha, Eine indische Dichtung. 1922
- (22) Nachwort zum „Weg nach Innen.“ Vier Erzählungen. 1931. 高橋健二『「クマヤ研究」クマヤ全集別巻』新潮社、昭58、一六〇頁。『シンドバッド』等四篇を含む『内面への道』の後書²。
- (23) Vorrede eines Dichters zu seinen ausgewählten Werken. 1921.
- (24) Die Nürunberger Reise. Bd. 7. S. 117 ff.
- (25) Über Jean Paul. 1921. Bd. 7. S. 249 ff.
- (26) Piktors Verwandlungen, ein Märchen. Chemnitz. 1925. 初めは絵入り自筆版、1945複製版、1985 Märchenに収録。
- (27) Nachwort zur Schweizer Aufgabe des „Steppenwolf“ 1941. G. W. in 19Bde. Bd. 11. S. 54
- (28) Jacob Boehmes Berufung. 1922, Bd. 7. S. 272 ff.

- (26) Kindheit des Zaubers. Bd. 4. S. 449 ff.
- (28) Kurzgefaßter Lebenslauf. Bd. 4. S. 469 ff.
- (35) Kurgast. Bd. 4. S. 57~117.
- (38) Aufzeichnung bei einer Kur in Baden. Bd. 4. S. 914
- (39) Balzac. 1925. Bd. 7. S. 295 ff.
- (34) 前田'宮澤'『くまの研究』一八四頁以下参照。